

「信仰継承を目指して」

鳥栖曾根崎キリスト教会 宇山 誉



あなたはむすこ、娘…と共に、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所で、あなたの神、主の前に喜び樂しまなければならぬ。

申命記 16・11

教会学校を始めた頃、我が家の子どもたち、信徒の一家族の子どもたちを核とし、その友達などが集まり、賑やかな教会学校でした。しかし、彼らが中学生になると、殆どの子どもたちが教会から離れていきました。この事があってから改めてCS教師の中で問われるようになった事は、教会学校の子どもたちが礼拝に繋がらないのは何故か、でした。

「子どもと一緒にの礼拝」鞭木由行（いのちのことば社）の本の一節の中に「当時、教会学校の教師として聖書教育のカリキュラムに沿った教育や諸行事には熱心であっても、子どもたちの魂を直接取り扱うことに十分な時間を割かなかったことが（教会に子どもたちが定着しない

ことの原因ではなかったか：学校教育のまねごとをしても、魂そのものを扱うことはできなかった：学校という名称自体もふさわしかったが疑問が残る」とありました。同じ様な反省を私たちも持ちつつ、数年前から、今まで礼拝の前に行っていた「教会学校」を止めて、通常行っている大人の礼拝を「子どもと一緒に集う礼拝」にしてみてもどうかとCS教師らと話し合いの中で開始することにしました。但し、メッセージの時は、子ども用のメッセージ（CS担当教師が行う）と、大人のメッセージに分けて行います（聖書箇所は子どもも大人も同じ）。ここで重要なことは、子どもと一緒にの礼拝を献げつつも、クリスチャンホームの家族が、親子で一緒に礼拝を守っているという意識を持つことです。そのために、毎週土曜日に「夫婦の学び（夫婦で参加）」、「シエマ教室（親子で参加）」を交互に行っています。やはり子どもへの信仰は、親が直接受け持つことが大切ですし、その為にも、夫婦が共にクリスチャンであるならば、聖書に教えられながら夫婦共に向き合い、子どものために心を合わせて祈る時を持つことが必要不可欠です。※子ども伝道の働きは、毎月一回、土曜日集会を行い、礼拝に繋げようとしています。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
教師養成講座「教会学校のリバイバルを求めて」	3
神 ▲ 7 / 2 ～ 7 / 16 ▼	11
ノア・族長 ▲ 7 / 23 ～ 8 / 20 ▼	29
キリストのみわざ ▲ 8 / 27 ～ 9 / 10 ▼	59
イスラエルの指導者 ▲ 9 / 17 ～ 9 / 24 ▼	77
牧羊ひろば（川本教会）	89
カリキュラム	95
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシヤ語は〔G〕、ヘブル語は〔H〕、アラム語は〔A〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
 団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
 版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子
 どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
 上、日本児童福音伝道協会）、PW：「ブレイズワールド」（リビングブレイズ）

「教会学校のリバイバルを求めて三」

神戸大石教会 金井 望



第三章 日本伝道のブレイクスルー

第一節 伝道の社会的障壁

ウィルクス師をはじめ多くの伝道者が、伝道のモデルケースとして主イエスのサマリヤの女への伝道（ヨハネ4章）に注目しています（『救霊の動力』第13章参照）。これを参考にしつつ論考を進めます。

サマリヤの女はイエスに言った、「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」。これは、ユダヤ人は

サマリヤ人と交際していなかったからである。（9）

サマリヤは北王国イスラエルの首都でしたが、その都市は紀元前722年にアッシリア帝国の軍隊によって滅ぼされました。イスラエルの指導者ら二万人以上がアッシリアに捕囚として連れ去られ、代わりに帝国の各地から移民がこの地に入植しました。その後、イスラエルの残りの民と入植者の雑婚が進んで、サマリヤ人となったのです。彼らはゲリジム山に神殿を築いてユダヤ人・エルサレム神殿に対抗しました。そしてモーセ五書を何千個所も改竄して独自の「聖書」を作りました。ユダヤ教徒から見れば、サマリヤ教徒は異端です。

前2世紀のマカバイ戦争では、サマリヤ人はセレウコ

ス朝に味方してユダヤ人を攻撃し、ユダヤ人は報復としてゲリジム神殿を焼き討ちにしました。このような関係ですから、ユダヤ人はユダヤとガリラヤの間を行き来する時、サマリヤを避けてヨルダン渓谷を通りました。

ところがこの時、主イエスはあえてサマリヤを通ってユダヤからガリラヤに帰ることとされました。主がサマリヤ人に伝道することに、重要な意味があったのです。

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。

(使徒1・8)

私たちが日本で伝道する時にも、民族や国家、共同体の宗教といった社会的な障壁にぶつかります。これを打ち破るためには、それが何であるか正しく理解して、適切に対処する必要があります。「日本の宗教人口は2億人」と言われますが、一つの家が神社の氏子であり、寺院の檀家でもあります。この場合、宗教とは地縁と血縁による共同体への所属を意味しています。「キリスト教

は、日本を侵略した外国の宗教だ。受け入れたら日本人の民族性が失われる」。そんな意識が染み付いていて、抵抗感のある人が未だに少なくありません。子どもが小学生なら教会学校に通うことを許していても、中学生になつたり、「洗礼を受けたい」と言い出したりしたら、教会に行くことを禁じる家庭もあります。

第二節 檀家制度の崩壊

「わたしたちの先祖は、この山で礼拝をしたのですが、あなたがたは礼拝すべき場所は、エルサレムにあると言っています」。(20)

長寿社会、少子化、地方圏から大都市圏への人口の移動、グローバルゼーションなどによって、日本の家族や地域社会は著しく変化しています。過疎化、限界集落化、地方消滅、認知症社会、無縁社会という現実が広がっており、神社や寺院を支えてきた伝統的な血縁共同体と地縁共同体が瓦解しているのです。

現代の日本人は、7割が無信仰・無宗教を自認するほ

ど世俗化・宗教離れが進行しています。自分の家がどの宗派のどの寺院の檀家であるのか分からない、あるいは寺院との関係を持たない家庭が増加しています。キリシタン絶滅政策であった檀家制度が崩壊しつつあるのです。家の宗教・宗派が特に問題となるのは葬式です。

①葬祭の情報サービス会社である鎌倉新書が二〇一四年に関東圏で実施した調査の結果は次のとおりです。

一般葬（参列者が31人以上）	34パーセント
家族葬（参列者が30人以下）	32パーセント
一日葬（一日だけの葬儀）	11パーセント
直葬（葬儀を行わず火葬のみ）	22パーセント
②エンディングデータバンク社の調査によると、二〇一六年の首都圏での葬式の費用は次のとおりです。	
50万円未満	21・1パーセント
100万円未満	26・5パーセント
150万円未満	27・6パーセント
200万円未満	10・2パーセント
250万円未満	6・3パーセント
300万円未満	2・5パーセント
500万円以上	5・7パーセント

③日本消費者協会が実施した第10回葬儀についてのアンケート調査（二〇一四年）によると、葬儀費用の合計は全国平均額で188・9万円でした。これは年々下降しています。その内訳の主なものは次のとおりです。

葬儀一式費用（通夜式・告別式） 122・2万円
 寺院への費用（お経、戒名、お布施） 44・6万円
 最近の葬式には次のようなトレンドがあります。

①従来一般的であった臨終↓密葬↓通夜式↓本葬儀・告別式↓火葬↓法要↓納骨という流儀が崩れています。

②葬式を一日で済ませるケースが増えています。

③少人数で行う家族葬や直葬が増えています。家族葬に特化した小規模でローコストの葬祭場が増えています。

④僧侶を呼ばずに葬式を行うケースが増えています。

⑤葬儀とは別に「お別れの会」をホテルなどで開催するケースも増加しています。

ちなみに筆者は、タイミングによっては教会の主日礼拝を「追悼礼拝」として、それを本葬儀にしています。また、故人が地域社会で活躍していた場合、ご自宅で「お別れの会」と称して、会葬者100名以上が次々と入退場し献花をする前夜式を行うことがあります。長寿化によつ

て喪主や遺族も高齢者が多くなり、葬式に二日も三日もかけることは体力的に困難になっているからです。

第三節 宗教消滅

「この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」。(13～14)

最近の葬式の変化には、経済的な事情も関係しています。一九九一年（平成3年）から20年以上続いた平成不況によって、パート、アルバイト、派遣社員、契約社員等の非正規雇用労働者と貧困層が増加し、日本の相対的貧困率は16パーセントに達しています（厚生労働省「国民生活基礎調査」二〇一二年）。生活保護受給世帯数は一九九〇年には62万世帯でしたが、二〇一四年には161万世帯を越えました。

ところが、戒名料の相場はバブル経済の時期にインフ

レを起こしたまま下がらず、信士・信女が30～50万円、居士・大姉が50～70万円、院信士・院信女が80万円以上、院居士・院大姉が100万円以上だそうです。これでは寺院離れが起こるのも当然でしょう。

そもそもインドの初期仏教や部派仏教は、葬儀と関係が無いものでした。キリスト教など西方の宗教から影響を受けて生まれた大乘仏教が中国に伝わり、そこで儒教の影響を受けて葬式仏教が生まれたようです。戒名は本来、出家者の証であって、在家の信者が持つものではありません。最近は、こういった真実を明示する書籍が次々と発行されています。

今や「寺院消滅」の時代と言われています。二〇一五年には約7万7千の寺院がありました。そのうち2万以上の寺院が無住（空き寺）であり、約2千の寺院は活動実態がありません。専門家の試算によると、二〇四〇年には日本の寺院の3～4割が消滅しかねない情勢です。

ただし宗教学者の島田裕巳氏によると今は、仏教の寺院だけでなく神道の神社も新宗教の施設も含めて「宗教消滅」の時代のようです。

我々キリスト教会の課題は「寺院や神社に代わって、

教会が地域の人々の受け皿になれるか」ということです。寺院や神社が日本の地域社会においてソーシャル・キャピタル（社会資本）として果たして来た公共的な役割は、絶大なものです。「教会は所属する会員＝クリスチャンのことしか考えないし、配慮しない」と見られるようでは、教会は地域社会で生き残れないかもしれません。

兵庫教区婦人部では、昨秋の例会で「ひと味違う終活セミナー」を開催し、エンディングノートの書き方などを学びました。男性も含めて209名の参加者があり、大変好評でした。この分野は教会だけでなく伝道においても大きな可能性があります。

クリスチャン企業のライフワークス社やブレス・ユア・ホーム社は、教会に所属していないクリスチャンやノンクリスチャンのための葬儀も行っており、登録した牧師を教会外のキリスト教式葬儀に派遣しています。これは日本宣教において画期的な活動です。

第四節 芋づる式の伝道

「あなたは、この井戸を下さったわたしたちの父ヤコ

ブよりも、偉いかたなのですか。ヤコブ自身も飲み、その子らも、その家畜も、この井戸から飲んだのですが」。

(12)

日本の従来の伝道は「一本釣り」が多かったのですが、終活・葬儀は「芋づる」式の伝道となります。葬儀には故人の子どもや孫、ひ孫まで参列します。

キリスト教式葬儀は自然に伝道となります。葬儀は、誰もが生と死の意味を考えさせられる厳粛な場です。死は、参列する人すべてがいつかは経験しなければならぬ現実です。参列者が「私も家族もこうやって葬式をするのだろうか」と思えば、その家の宗教はキリスト教に定まります。そこからキリスト信仰に進むのは容易です。

筆者が牧会する神戸大石教会は宣教開始から86年の歴史があります。筆者は着任してから一年半ほど、長老のご自宅に何度も通って教会の歴史を学びました。その長老は教会の歴史と信徒の証しを記録した『群乃足跡』という冊子を何度も発行しました。筆者は長老にお願いして、教会員の家系図を作っていただきました。これらは葬儀だけでなく伝道牧会にも非常に役立ちます。

第五節 文化的障壁のブレイクスルー

「あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもないので、父を礼拝する時が来る」。(21)

イエス時代のユダヤとサマリヤは、①アレクサンドロス大王の東征(前334〜前323年)以来続くヘレニズム(ギリシア文化のオリエント世界への浸透)の影響を強く受けており、②地中海世界を統一したローマ帝国によるパクス・ローマーナ(ローマの平和)のもとで世界中の人と文化に接触していました。③ユダヤ人やサマリヤ人も、当時の世界の共通語であるギリシア語を使いこなす人が大勢いました。

これは日本人が、①ザビエルの来日以来ヨーロッパ文化の影響を受けるようになり、さらに江戸幕府末期の開国以来、欧米との交流・貿易が盛んとなり、②太平洋戦争の敗戦以降パクス・アメリカーナのもとで世界中の人と文化に接触するようになって、③世界の共通語である英語を使うようになったことと似ています。

ただし、主イエスが復活後、世界宣教命令を下したの

に、聖霊降臨後も弟子たちは「エルサレム、ユダヤ」から外に出ようとしませんでした。ヘブライスト(アラム語を日常的に使うユダヤ・ガリラヤのユダヤ人)には、サマリヤ人や異邦人に対する拒絶感があったのです。

けれど間もなく、ステパノの殉教に続いて起こった迫害によって散らされた弟子たちによって、サマリヤの伝道が行われ、世界宣教が開始されました(使徒行伝8章)。その弟子たちは長年外国で生活してきたディアスポラ(離散民)であり、ヘレニスト(ギリシア語を日常的に使う人)のユダヤ人でした。

近年、日本人の受洗者は、国内で洗礼を受ける人よりも外国で洗礼を受ける人の方が多くなっています。国際化(グローバルゼーション)によって、日本人伝道のブレイクスルーが海外ですでに始まっているのです。ただし、ディアスポラ日本人クリスチャンで帰国後に日本の教会につながる人は、2割くらいしかいないようです。

最初期の教会では、割礼・食物・安息日・祭儀などの律法の規定と慣習が、異邦人伝道の障害となりました(使徒11・1〜3、コロサイ2・16)。今日の日本の教会は、伝道の妨げとなるものに固執していません。教

会の伝統文化も大切ですが、異なる文化も受容して良いのではないのでしょうか。CS教師には、現代の子どもや若者の文化を理解する努力が必要です。

第六節 知的障壁のブレイクスルー

「あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っているかたを礼拝している」。(22)

第二章で述べたように、日本人には多元的な宗教性があります。また戦後70年間、科学万能主義・唯物論・進化論に基づく無神論的な公教育が為されてきました。

このような日本人の人々に対して、私たちキリスト者は辛抱強く、聖書・キリスト教が宗教的に唯一の絶対的な真理であることを、証ししなければなりません。そのためにCS教師は教理と弁証論を学ぶ必要があります。

教理は日本イエス・キリスト教団が発行している『信仰生活の指針』に簡潔に記されています。一九五六年に教団から発行された小豆正夫著『キリスト教のおしえ』というカテキズムがありました。文体や内容を現代的

に修正して、これを用いるのも良いでしょう。弁証論はハロルド・ネットランド、内田和彦著『キリスト教は信じられるか』（いのちのことば社）をお薦めします。

現代の子どもや若者への伝道においては、メディアが重要な鍵となっています。筆者は聖書・キリスト教関係のマンガを収集して、教会で閲覧・貸出をしています。筆者は二〇一〇年に神戸バイブル・ハウスで、二〇二一年には東京の教文館で仲間と共に「マンガ・アニメ聖書展」を開催しました。日本人が作るマンガはクオリティーが高く、世界中で人気があります。ケリー篠沢作『マンガ・メサイア』は70万部以上頒布され、イスラム圏でもキリスト教のリバイバルを起こしています。

「アンダー25」と言われますが、今25歳以下の人たちは、パソコンやインターネットがあつて当たり前という環境で育っています。内閣府の調査によると、スマートフォン（スマホ）の所有率は中学生が51・7パーセント、高校生は94・8パーセントにのぼります。スマホによるネットの利用時間は中学生で平均124分、高校生だと平均で170分もあります。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）とりわけLINE（ライン）が若者た

ちの交流の場となっています。紙の本を読まず、スマホの画面ばかり見ている若者たちに伝道するためには、ユーチューブで福音的な動画を公開し、LINEやツイッターで拡散することが有効でしょう。

第七節 霊的障壁のブレイクスルー

「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである」。(24)

「あなたと話をしてこのわたしが、それである」。

(26)

聖書において「霊」という語は天的な存在の次元を表し、あるいは人が持つ神との交流能力を意味しています。信仰とは、キリストにあつて啓示された神との出会いから始まり、神との人格的な交わりを深めていく営みに他なりません。その出会いは、イエスをキリストと信じて、新生し、神の御霊を宿している人との交わりを通して、与えられるものです。この交わりは電子空間では足りず、フェイス・トゥ・フェイスが大切ではないでしょうか。

最後に一つの提案をさせていただきます。それは、①信徒が主体的に、②自分たちが暮らしている地域で、③土曜日や祝日に、④所属している教会を超えて集まり、⑤子ども伝道あるいは教会学校を行うということです。

二代目、三代目、四代目と信仰継承が続けば良いのですが、教会から離れた地域に転居したりするうちに、子どもや孫らが日曜朝の教会学校から離れてしまったというケースが少なくありません。それならば、自分たちの住んでいる地域で協力して何とかしようよ、ということ。案外、近所に同じ教団の信徒がいたりします。

協力教会制度をこのために活用できないでしょうか。メンバーが二、三人でも集まったならば、まずはお互いの課題を分かち合い、テキストブックを読んで学び、共に祈ることから始めてみたら、いかがでしょうか。

もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであらう。ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。(マタイ18・19～20)

聖書 イザヤ40・21～26 テーマ 創造者なる神

序論

(小泉 創)

今は、知らないこともネットで容易に知ることが出来ます。見たことのないものも調べられ、行ったことのない場所の写真も見ることが出来ます。何でも知ることが出来るし、行くまでもない気さえしてきます。しかし、本当に知らなくてはいけないことを、知っているでしょうか。

一、天地を造られた主(21～22)

「あなたがたは知らなかったか。あなたがたは聞かなかったか」。これは、知っているはずだろう、聞いたはずだろう、という神様からの語りかけです。

天地を造られた神が、聖書に教えられている神です。私たちは宇宙の始まりのことも十分に知りません。地球上の動植物についても、まだ人が分け入ったことのない場所のことも、とても身近な私たちの体のことも、心のことだって、知り尽くしているわけでもありません。

聖書は、神がすべてをおつくりになったと教えています。神は、不思議にあふれて到底知り尽くせないこの世界の上に座しておられます。すべてのものをおつくりになった神がどれほどに偉大なお方であるかということです。

二、人のはかなさ(23～24)

ここでは地を治めている権力者たちがどんなに力を誇って、自分が神のごとき力を持つと胸を張ったとしても、実は「はかるうじて」(新改訳「やっと」)生かされている存在にしか過ぎず、たちまちの内に消え去っていくはかない存在であることが指摘されています。はかなく、誤りやすい存在なのに、何をすることもゆるされて、何でもコントロールできると考えているとしたら、とんでもない思い上がりです。神の恵みによって生かされている私たちなのです。

人は本来、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」(創世記1・28)という神の命令のごとくに、この世界を正しく管理することを願われていました。しかし、愚かにもおごり高ぶり、神をおそれることを忘れて、好

き勝手にむさぼってきました。それは決して過去の問題ではなく現代でも、公害、環境破壊の問題は繰り返されています。その対応を通して、人がいかに利他的で無責任で、弱い者に犠牲を強いるか、人の罪の姿が明らかになります。原発のことを通しても人のおごりが見え隠れしています。

三、神を仰ぎ見よ(25～26)

はかない存在である人間は、偉大な神の目には、どのように映っているのでしょうか。驚くべきことに、神は人間を見放すことをせず、関心を持ち続けてこられました。私たちの目はどこに向かっていたのでしょうか。生きておられる神と比べられるはずもないさまざまな偶像につき従っていた愚かさは恥じ入るばかりです。それらのものは神につくられたものにはか過ぎなかったのです。目を高くあげて(26)偉大な神を仰ぎ見ましょう。神はあわれみ深く、はかない人間に目をとめ、罪をきよめ、いのちを与え、どのようなところからも新たにやり直させることができます。どのようなものをも神の子として迎えてくださり、たえず力を得させることのできる(31)

恵みにあふれた神です。

むなしきもの、はかない自分自身ではなく、神を知らせていただきましょう。私たちには神のすべてを知り尽くすことは不可能ですが、人格的な関係をもつことがゆるされています。神の愛を受け取り、その中で神と共に生きていけるのです。そのために神の御子が人となっておくださり、罪深い私たちのために、十字架で命をなげうってくださいました。ご自分で造られた世界のために、命さえ投げ出してくださる神に目をとめ続けましょう。

結論

何と圧倒的な神の偉大さでしょうか。その神が、小さくはかない私たちをどれ程までに愛してくださっていることでしょうか。思いあがることなく、自己卑下することなく、神に目を留め、そのお方によって生かされていることを喜びましょう。

研究資料

(金井由嗣)

神を知ることの大切さ

本日から三回にわたって、聖書が教える真の神について学ぶ。昨年増補改訂版が出た『救霊の動力』の中で、ウィルクス師は異教国日本の伝統的な神観念が宣教の大きな妨げとなっていることを指摘している(第12章「偶像崇拜」)。みことばの光に基いて、神についての正しい理解を持つ必要がある。

万物を創造された唯一の真の神を知るとは、単なる知識ではなくその人の世界観の根底、信仰者の生涯を支える大きな土台である。そのことについての最良の書物としてバツカー『神を知るということ』を推薦する。キリスト者として一度は読んでおきたい本である。創造者として神を知ることの意義については『聖書神学事典』の「創造」の項目を参照。

文脈

40章から始まる、神の民イスラエルの解放を告げる慰めと救いのメッセージの一部である。直接にはバビロン捕囚からの帰還を示しているが、終末的メシヤ預言をも

含んでいる(鍋谷)。9～11節でその「慰め」をもたらす神に聞き手の注意を向けさせ、12～31節ではその神が創造者であることが救う力の根拠として示されている。この主題は43～44章で詳しく語り直される。

テキスト

12 あなたたちは知らなかったか。：聞かなかったか。：伝えられなかったか。最初の二つの動詞を新改訳は「知らないのか」と現在形に、新共同訳は「知ろうとしな

いのか」と意思の問題として訳している。この二つの動詞は未完形であり文法的には新改訳が原文に近いが、最後の「初めから伝えられなかったか」は反語であり、「(実際にはモーセ以来預言者たちを通じて) 伝えられていたではないか」との非難を含んでいる。新共同訳はそれに対応して(聞かされていないが)「知ろうとしな

か、地の基をおいた時から (新改訳、新共同訳は「置かれた」と受け身で訳す) 知ることは出来たはず、とまで言われる。正しい理性を持つて世界を観察すれば、この天地が神の創造によって生まれたことがわかるはず、との一種の自然神学が前提されている。

22 主は地球のはるか上に座して：創造者である神が被造物を超越した存在であることが語られている。物理的な距離や広さを表現に用いるのは当時の人々の語彙で語るためであって、語られているのは本質的な意味での神の超越性である。「創造は創造者と被造物を厳然と区別する神の行為であり、それは神を超越的存在として認識させ得る。…唯一神は超越神となり、多神は汎神ないしは万有在神となる。これは一に、創造神信仰の有無にかかっている。」(『聖書神学事典』)

23 もろもろの君を無きものとせられ、地のつかさたちを、むなしくされる 神の超越性は地上の権力に対しても示される。「君」と「つかさ」、「無きもの」と「むなしもの」は強調のための並行法であり、厳密に区別する必要はない。神の民を支配するバビロンの巨大な権力も神の前では「無に等しい」と宣言されているのである。

24 彼らは、かろうじて植えられ、…つむじ風にまき去られる 地上の権力の栄枯盛衰のはかなさを表現しているが、それもまた創造者である神の主権のもとでの出来事として描かれている。

25 聖者 ここでは創造者・超越者なる神の自称である。

「聖」〔へ〕カドシユの基本的な意味は「区別する」であり、被造物から厳然と区別される神こそ「聖」という言葉にもっともふさわしい方である。イザヤ書で26回も使われている「イスラエルの聖者」という表現も心に留めるべきである。あなたがたは、わたしをだれにくらべ：神が超越者である以上、被造世界の何ものとも比べることはできない。異教の神々や、地上の支配者を真の神との比較の対象とすること自体が神への冒瀆ぼうとくなのである。

26 目を高くあげて、だれがこれらのものを創造したかを見よ 実際に神の創造された天を見上げることが求められている。万軍 新改訳、新共同訳では「(天の) 万象」。直訳は「多くの軍隊」であるが、ここでは空にある無数の天体を比喩的に表現している。照明のない当時の夜空に広がる天体を数え尽くすことは不可能だったが、創造者である神はそのすべてを数え上げて「一つも欠けることのないように」配置される。その神が自分たちを解放し守るお方であることに思いを向けよ、と命じている。

参考図書 鍋谷堯爾『人間イザヤとその思想』、同『イザヤ書注解』、モティア(ティンデル)、ワイブレイ(ニューセンチュリー)、Oswalt (NICOT)。

聖書

イザヤ40・21、26

タイトル

天地創造の偉大なる神

暗唱聖句

目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ。

目 標

イザヤ40・26
神が万物の創造者であることを覚えて生きる。

導入

(松浦みち子)

「一、ささの葉さらさら のきばにゆれる お星さま
さらさら きんぎんすなご 二、五色のたんざく わた
しがかいた お星さまさらさら 空からみてる」
たなばたの歌ですね。みなさんは天の川を見たことが
ありますか？ 目を高くあげて、夏の夜空をながめてみ
ましょう。この素晴らしい星空をだれが造ったのだらう
と、ふしぎな気持ちになることでしょう。

天地の創造者

聖書の一番最初に「はじめに神は天と地とを創造され
た。」(創世記1・1)と書かれています。神様が天地を
お造りになったことがはっきりとわかるみ言葉ですね。
では、どのようにお造りになったのでしょうか。初めに、

神様は「光よ、あれ」とおっしゃいました。すると、光
がさつと差し込んで、昼と夜ができました。神はこの光
を見て、とても喜ばれました。創造の一日目です。二日
目には、「大空よ、水の間にあれ」と言われると、大空と
水に分かれ、空には雲が浮かびました。三日目は陸です。
神様が「かわいた所が現れよ」と言われると、陸地が現
れ、そこに美しい花や植物、果物なども造られました。
四日目は、昼と夜を区別する太陽と月や星をお造りにな
りました。五日目には、海と陸の生き物、魚と空の鳥を
お造りになりました。六日目には、すべての動物をお造
りになり、最後にご自分のかたちにかたどって、人間を
お造りになり、その鼻からいのちの息を吹き込ままし
た。これが動物と人間の違いです。人間には、神様のこ
とを考えたり、感じたり、愛したり、交わることができ
る魂が与えられたのです。神様はお造りになったすべて
のものを見て、非常に喜ばれ満足されました。七日目は、
神様はみわざをお休みになりました。創造は完成したの
です。この創造のわざは、神様のおことはだけで造られ
ました。「主が仰せられると、そのようになり、命じられ
ると堅く立ったからである」(詩篇33・9)。

わたしたちの目を高くあげよう

「主は地球のはるか上に座して、地に住む者をいながらのように見られる」(イザヤ40・22)。「目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ」(イザヤ40・26)。神様は、天からわたしたち一人ひとりを見ておられます。ですから、わたしたちも目を高くあげ、神様の創造のわざを見てほめたたえるものとなりましょう。空高くそびえる山々、力強く盛り上がる入道雲、空を飛ぶ鳥、蝶や虫たち、海の生き物、草や花々、ちよつと足を止め観察しましょう。きつと、神様の御手のわざに気付くことでしょうか。「神さまって、すばらしい!」と。

天地創造の神に出会い人生が変えられた人

一八四三年一月14日に江戸(今の東京)の新島家に初めての子が誕生した。七五三太と名付けられ、幼い頃から両親の影響を受け、やさしく信心深い子供として成長していった。丁度10才のとき鎖国の扉が破れ、アメリカのペリー提督が来航し、子ども心に、未知の世界が知りたいという学問への渇きが沸き起こりひたすら学問に励んだ。ある日のこと、彼は友人の家で小さな聖書に出会い、生まれて初めて神様のことばに触れた。彼に

とって一生を揺り動かすほどの驚きであり、「はじめに、神は天と地とを創造された」とはどういう神様か? 自分の知っている神様は、病気を治してくれるとか安全を守ってくれるとかというものであった。そして、人間の住む家よりみすばらしい箱に入れられたり、祠ほこらに祭られているものだった。神様は天地を創造されたという。それなら、私をつくったのはだれか? 両親か? 「そうではない。母は私をつくったのでなく生んだのだ。私をつくられたのは神だ。天地を造られた神が両親をもつくり、私をつくられたのだ」「今までの神様はほんとうの神ではない。私は、本当の神様を無視してきた。本当は心から感謝しお礼を申し上げなければいけなかったのだ。そして、神様を信じ心正しくあらねばならないのだ」と創造者である神を知り、喜びに溢あふれて、初めて祈ったのです。「神様、天地をお造りくださった事を感謝します。今まで知らなかったことをお詫びします。どうぞ、わたしに目をとめ、耳を傾けて下さい」と。彼はやがてアメリカにわたり「襄じょう」と名前をかえ、素晴らしいキリスト者となり、その生涯を神様と人のために用いました。

♪輝く目を仰ぐとき♪(新聖歌21)

聖書 イザヤ6・1〜7 テーマ 聖なる神

序論

(石田高保)

イザヤはユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤと約50年にわたって預言者として働いた人物です。王に直接進言できる立場にありました。既に預言活動をしていたイザヤですが、神殿で礼拝をしている時、思いがけなくも神様から預言者として改めて召されることになりました。6章はその出来事を記しています。

一、聖なる神を見る

イザヤは礼拝している最中に、神殿の天井をはるかに突き抜けた天空に神様が王座に座っているのを見ます。その衣のすそが神殿に満ちていることからしても、そびえ立つお姿であることが察せられます。突然のことでもあり、思ってもよらない光景を見たイザヤの畏れはどれほどだったでしょうか。これまで何度も礼拝をささげてきたことでしょうか、その主が目に見える形でご自身を表されたことにはただただ圧倒されるばかりだったことでしょうか。そればかりかセラピムという御使いの姿も見ます。彼らは神様のいち

ばん近くで賛美する働きを担っているようです。イザヤは聖なる神をたたえる賛美を聞くことになりました。

神様や御使い、それに関連する神聖な現象を目にしたら、人間は打たれて死ぬものと考えられていました。ですからこのときイザヤは「わたしは滅びるばかりだ」と言ったわけです。そして神様の聖さに圧倒され、自分の心の汚れに向き合わざるを得なくなります。彼はこれまでもいけにえをささげる儀式の中で罪の悔い改めをしていたでしょう。しかしこのたびは聖なる神と相まみえたとき、あれこれの罪ではなく、自分という存在自体が罪深いことを見せられました。彼はこれからどうやったら解放されるのだろうかと思ひ苦しみます。私たちの大なり小なり同じようなところを通ったのではないのでしょうか。これはイザヤのように聖なる神様を心の目で見たという体験になります。

同じような出来事が新約聖書にあります。ペテロはイエス様の言うとおりに網を下ろしたところ、思いがけない大漁となり、畏れて言います「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」(ルカ5・8)。ペテロはイエス様の中に神聖なものを感じています。

もちろん神は愛なる方ですから、人類の一人残らず無条

件の愛を注いでおられます。たとえ愛が感じられないという人があっても、神はその人のことを目に入れても痛くない存在と見ておられます。しかし同時に神は聖なる方です。その人の罪が取り除かれられない限り、神様といのちの関係を持つことはできません。

二、聖なる神に赦される

みずからの罪深さに悔い崩れているイザヤに、セラピムのひとりが燃えている炭を手に携え、彼の唇に触れて言います（あなたの罪はゆるされた）。現実はこのようなことをしたら、大やけどを負います。もちろんイザヤは何の害も受けませんでした。これは灼熱の炭が神のきよめる力を象徴しており、口に触れたことで言葉に代表される罪深さをきよめたということになります。しかも、（あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた）と明確に宣言されています。これはセラピムをおして神様が言われた言葉と思われます。

私たちにおいても神様は聖なる方ですから、罪を取り除かれないままに近づくことは許されません。しかしただ一つ神様に近づく道があります。セラピムは聖所の祭壇から燃えている炭を持ってきました。私たちにはイエス様の十

字架という祭壇から血潮が注がれ、「イエスの血によって、はばかりことなく聖所にはいることができます」ます（ヘブル10・19）。十字架は神様の聖を表してもおり、その前に自分の罪深さを示されます。罪の悔い改めと十字架による罪の赦しを受け取ることによって罪は赦され、私たちは神様から義と認められます。これまでいつさいの罪と汚れは帳消しにされ、神様から十字架のゆえに全面的に受け入れられるのです。

そしてクリスチャンとなった人は（あなたの罪はゆるされた）という神様の宣言を折にふれて受け取り続けるのです。「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」（Iヨハネ1・7）。

結論

イザヤは聖なる神様に出会って自分の罪深さを探られますが、罪の赦しの宣言を明確にいただきます。このときから彼は預言者として再任命され、背信のイスラエルに遣わされます。イザヤでなくてもクリスチャンの誰もが生活の現場に遣わされています。そこでイエス様の愛と聖さを体現しキリストの命を流すことができるのです。

研究資料

(辻林和己)

イザヤ書6章のこの個所は預言者イザヤの見神(ビジオ・デイ)の体験を告げる。イザヤが礼拝のため神殿にいたときの体験であろう。神がご自身の聖なることを顕わされ(聖臨在)、イザヤが祭壇の火できよめられたことが語られる。

テキスト

1 **ウジヤ王の死んだ年** 紀元前740年(諸説あり)。アハズ王の時代である。ウジヤ王は優れた資質に恵まれ、ユダ王国の繁栄を取り戻した中興の祖とも言うべき人物であった。しかし、後年、神殿の神聖を汚し、重い皮膚病となった(歴代下26・16～22)。**主が**…ここでの「主」は(ハ)アドナイ)。イザヤは栄光の主の臨在に触れたのである。使徒ヨハネは、この「主が：見た」の個所をイザヤがイエス・キリストの栄光を見て言ったものと解している(ヨハネ12・41)。

2 **セラピム** 御使いを意味する(ハ)セラプの複数形。ケルビム(出エジプト25・18～22等)やミカエル(ダニエ

ル10・13、21等)とは区別される。語源的には「燃える」という意味。六つの翼のうち顔をおおう二つは「礼拝敬虔」、足をおおう二つは「謙遜」、飛びかけるための二つは「奉仕」を表しているとされる(山室軍平『民衆の聖書』、バックストン『説教集』等参照)。

3 **聖なるかな** 「聖なる」は(ハ)カードーシユ。これは形容詞であるが動詞「聖とする」は(ハ)カードダシユ。原意は諸説あるが、「分ける」というのが通説。神が神以外の一切のものから「分けられている(隔絶されている)」、すなわちイスラエルの神の超越性と唯一性を示す。**万軍の主** 単に御使いを従えて戦う主のことではなく、天と地のすべてを支配する御方という意味。**栄光** (ハ)カード(ポード)はイザヤの好んで用いた言葉で、イザヤ書全体で38回も使われている。ここでは、主の栄光は天ではなく**全地に満つ**と叫ぶ。

5 **わざわいなるかな** 神の聖さと栄光の前に自分の罪深さを示されたイザヤの叫び。自分の存在そのものが「わざわい」であることを示された。**わたしは滅びるばかりだ** ここでは「滅びる」(ハ)ダマー)の完了形が用いられている。「私は滅んだ」のであり「滅んでいる」ので

ある。イザヤは自分が罪人であり、霊的に死んだ者であることを自覚した。くちびるの汚れた者 くちびるは、言葉と心の象徴。くちびるが汚れていることは心が汚れていることを意味する。イザヤは、自分が汚れているだけでなく「民（イスラエル民族）」も汚れていることを告白する。

6 祭壇 これは全焼のいけにえの祭壇、または香をたく祭壇。燃えている炭の「火」は汚れを除くものであり、神の聖を示すものである（申命記4・24、ヘブル12・29参照）。

7 これがあなたのかちびるに触れたので 燃えている炭が、イザヤの最も弱く、最も汚れたところに触れた。これは神の救いのみわざがイザヤの人格全体になされたことを示す。あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた。「悪」は〔ア〕アーウォーン。新改訳では「不義」と訳されている。セラピムの語る言葉は、イザヤの罪が贖われ、汚れが除かれ、聖なる神の御前に立ちえる者、神の御用に携わる預言者としてきよめられたとの宣言であった。

そしてこの後に、イザヤは主の派遣の御声を聞き、そ

れに応える（8）。

神の祭壇の火によってイザヤがきよめられたことは、罪の汚れのきよめはただ神の恵みによってのみなされることを示している。イザヤがそうであったように、罪深い私たちができることは、罪の悔い改めと自己絶望の告白だけである。イザヤの罪の赦しときよめは、主イエスの十字架による贖いの先取りである（ローマ3・24、エペソ2・4～5）。

火は罪を焼き尽くし、きよめる聖霊の象徴である。イザヤが火によってきよめられたことは、ペンテコステの先取りでもある。ペンテコステの日、弟子たちの上に臨んだ聖霊は「炎のような分かれた舌」であった。（使徒2・3 新改訳）。主の十字架と聖霊によって私たちは罪赦され、きよめられた。「義と聖とあがないとになられた」（1コリント1・30）主イエスによって私たちは聖とされ、神の臨在に触れることができるのである。

参考図書 鍋谷堯爾「イザヤ書」『新聖書注解』（いのちのことば社）、服部嘉明「イザヤ書」『新実用聖書注解』（いのちのことば社） 他

聖書 イザヤ6：1〜7

タイトル

聖なる神

暗唱聖句

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
万軍の主、その栄光は全地に満つ。

目 標

神が聖なるお方であることを覚えて生きる。
イザヤ6：3

導入

(和田 治)

先週の暗唱聖句、覚えていますか？ 「目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ」でした。今日の聖書のみ言葉を読めば、創造主であられる神様がどんなお方なのかを、さらに深く知ることができますよ。

神様を見たイザヤ

イエス様がお生まれになる七百年以上も前のことです。イザヤという、神様を信じる熱心な預言者が、いつものように神殿で神様を礼拝していました。すると彼の目の前に神様のお姿が現れたではありませんか！ 高き天の王座にお座りになっている神様の、ものすごい光が、神殿に満ち溢れています！ その上の方にセラピムという御

使いたちが見えました。三組の翼で飛びかけり、歌っています。「聖なる、聖なる、聖なるお方！ それは天の軍勢の主。全地は主の栄光で満ちている！」力強くきよらかなセラピムの大合唱が響き渡ると、神殿が土台から揺らぎ、聖所が煙でいっぱいになったのです。イザヤは恐ろしくてたまりません。思わず叫びました。「ああ、もうおしまいだ。こんな罪深い汚れた私が、こともあるうに天の軍勢の主である王を見てしまったんだから！」

そうなのです！ 実は、神様はとてつもなくきよいお方なのです。ですから、そのお姿をもし誰かが見たなら、その人は打たれて死んでしまうと言われていました。

きよくされたイザヤ

これまでイザヤは自分が罪深い人間だとは思っていませんでした。でも、あまりにもきよい神様の姿を見たとき、自分がどれほど汚いのか初めて分かったのです。

すると、セラピムの一人が祭壇へ飛んで行き、真っ赤に燃える炭を火ばさみでつまみ、それをイザヤのくちびるにつけて言いました。「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はすべて赦された」。不思議ですね。大やけどをするどころ

か、イザヤは全部の罪を赦され、きよくされてしまったのです。燃える炭は神様のきよめる力を表していました。心の汚い思いが言葉になって出てくる「口」に触れたのは、すべての罪が赦されることの証だったのです。

私たちがも…

私たちのことが大好きな素晴らしい神様は、このようにものすごくきよいお方です。ですから、罪を取り除かれないままに近づくことは絶対にできません！ どうすればいいのでしょうか。ただ一つ神様に近づく道があります。セラピムが聖所の祭壇から燃えている炭を持ってきて、イザヤは罪が赦されましたね。同じように、イエス様の十字架という祭壇から真つ赤な血潮が私たちのために注がれて、私たちは罪からきよくされるのです。イエス様の尊い「血」によってだけ、私たちはきよい神様に近づかせていただけるのですね。

例話

救世軍の創始者、ブース大將はある時、こんな夢を見ました。イエス様が釘付けされた十字架の前に自分が立っています。あまりにも苦しそうなイエス様を、何とかお助けしたいと願います。でもどうしても脚が前に進

みません。その時、一人の小柄な男がはしごをかついて十字架の下に駆けつけます。そして、はしごを十字架にかけて、上っていきます。「ああ、よかった！ イエス様を助けてくれる人がいた」ところがその男は、腰から金づち槌を取り出します。なんと、イエス様が釘付けされているその釘を、抜けないようさらに深くまで打ち込んだのです。「やめてくれ〜！」とブース大將は叫びました。男がふりむくと、何と彼は、ブース大將本人だったのです！

まとめ

皆さんはこれまで、神様の愛を信じて礼拝をしてきましたよね。それはすばらしいことです。でも、神様は私たちが思うよりもずっと聖なるお方なんです。本当なら決して礼拝したり親しく語りかけたりできないほど高く聖いお方です。なのに親しく交わってくださいるのは、イエス様が私たちに代わって罪の罰を受け、死んでよみがえってくださったからです。そうです、イエス様を十字架につけたのは、私たち一人ひとりなのです！ 今、もう一度心から、「イエス様、ごめんなさい。神様、本当にありがとうございます！」と祈ろうではありませんか。

♪両手いっぱい愛の（新聖歌483、ホ146、イン41他）

聖書 Iヨハネ4・7～11 テーマ 愛なる神

序論

(大頭真一)

神は愛なるお方。CS教師はこの「お方」に注意を払いたい。マクグラスはこの「人格神」の概念をキリスト教信仰の核心の一つに挙げている(「総説 キリスト教」237頁以下)。人格ある神は単なる知識として知ることとはできない。神は人格的な関係すなわち交わりを通してのみ知ることができる。それゆえ神と交わりことなしに神を語ることはできない。メッセージは交わりの結果であって、交わりなしのメッセージはあり得ない。交わりの中に神を体験し、体験した神の手ざわりを子どもたちに伝えよう。それが命を与えるメッセージなのだから。

一、一方的な愛

〈わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって〉とある。聖書の最初には「はじめに神は天と地とを創造された」(創世記1・1)とある。罪を犯した人に神は「あなたはどこにいるのか」(同3・9)と呼びかけられた。旧約時代を通して神は、顔をそ

むけるイスラエルに預言者を送り続けた。聖書は神の物語であり、その主語は神である。そして時至って、神はご自身の御子を送ってくださった。神は人間を捜し求めるあわれみの神なのである。あわれみの神は、私たち一人ひとりが滅びていくのをじっと見ていることがおできにならないのである。

二、犠牲的な愛

それゆえ神は〈わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった〉。父なる神と子なる神はひとつである。「神が御子の血であがない取られた神の教会」(使徒20・28)とある。つまるところ三位一体とは、私たちには理解できない不思議な方法によって、神ご自身が犠牲となってくださったことに尽きる。神は私たちのために何も惜しむことをなさらなかった。子をおえ物とする父として、父に供え物にされる子として、神は十字架の苦しみを何重にも味わい尽くしてくださった。何という愛だろう。

三、私たちの生き方を変える愛

「すべてが終った」(ヨハネ19・30)との主イエスの叫びは、創世記3・15の預言の成就である。ヘブル書には

「このように、子たちは血と肉と共にあずかつていたので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである」(2・14-15)とある。私たちは悪魔の奴隷であった。悪魔は私たちが神以外のものに存在理由を求めさせようとする。他の人よりすぐれた業績や学歴、容貌や持ち物がそれである。それらを失うときは生存の根拠を奪われるときだと、悪魔はささやく。死の恐怖である。こうして私たちは被造物にしがみつき、たがいに競い、ねたみ、他人の転落を喜ぶ。勝ったと言っては高ぶり、負けたと言ってはいじける。

けれども、神は私たちを解き放つ。神ご自身の血はあらゆる被造物への依存から私たちを自由にする。それが、アルコールや薬物、セックスへの依存であれ、ゆがんだ人間関係や持ち物、他人の評価や偶像への依存であれ、悪魔の支配は「すべてが終った」のだ。悪魔は十字架でキリストのかかとを砕いたけれども、キリストは同じ十字架で悪魔のかしらを砕いたからである。

今も悪魔は存在する。けれどもその支配力はすでに滅ぼされた。だれでもキリストの十字架を信じる者はもはや悪魔の奴隷ではない。神のかたちをとりもどし、たがいに心から、愛し合うことができる。自分より優れた人に対しては、その人から良きものを受けることができるようえに、その人を喜ぶ。また、自分よりも劣った人に対しても、その人に分け与えることができるゆえに喜ぶ。私たちはだれにも自分の存在理由を証明する必要がない。なぜなら、神がそれ以上ない証明をしてくださったからである。それが十字架である。十字架にあらわされた神の愛がその証明なのである。

結論

信じるとはあわれみの神のあわれみの中に自分をまらごと投げ込むことである。マタイ15章を見よ。「あなたの信仰は見あげたもの」(28)という主イエスのお言葉は、ただ神のあわれみを求めたカナン人の女に与えられた。大人も子どもも決して滅びてはならない。主イエスを信じないで死ぬようなことが決してあってはならない。涙をもって子どもたちのためにとりなしつつ、真っ正面から福音を語ろう。

研究資料

(宮澤清志)

今月は、「神」という単元のみ言葉が語られている。特に、神がどのようなお方であるのかに焦点を当てて語られる。

愛は、神の属性の中の一つであり、特に神が人間との関わりにおいて表される道徳的属性の中の代表的なものである。この神の、人間に対する愛について、パークレーは次のように述べている。①愛は神の本質である。②神の愛は「普遍的な」愛である(ヨハネ3・16)。③神の愛は「犠牲」の愛である(Ⅰヨハネ4・9)。④神の愛は、私たちが「それに値しない」愛である(ローマ5・8)。⑤神の愛は「あわれみ」の愛である(エペソ2・4)。⑥神の愛は「救い」と「きよめ」の愛である(Ⅱテサロニケ2・13)。⑦神の愛は「力強い」愛である(ローマ8・37)。⑧神の愛は、それから「引き離すことはできない」愛である(ローマ8・39)。⑨神の愛は「報いを与える」愛である(ヤコブ1・12)。⑩神の愛は「訓練」の愛である(ヘブル12・6)。神の愛についてこれらの箇所を引きながら思いを巡らすこともまた有益であろう。

さて、この手紙の執筆事情についてであるが、この手紙を使徒ヨハネが書いた時、キリスト教は広くローマ帝国に広まっており、大きな影響を及ぼす宗教となっていた。当然、その当時ローマを支配していた哲学や思想体系と福音を結び合わせようという努力もなされた。その結果、キリスト教の内部にも異端が入り込むことになった。ヨハネはそのような異端と戦うために本書を執筆したものと考えられている。また、当時の教会は偽教師に対する脅威にも直面していた。これらの異端や偽教師の主張に対して、神は光であり、愛であること、そしてイエス・キリストは神の御子であり、真まことの人であることを明らかにするために、ヨハネは本書を執筆したのである。

テキスト

7 この節では愛の源が取り上げられる。愛の源泉と言ってもいい。キリスト者が互いに愛し合う理由の一つが「愛は、神から出たもの」だからであるというのである。冒頭に示した「神の愛」とは、神をその源としているのである。愛する者たちよ ヨハネ特有の呼びかけであり、この短いヨハネの手紙の中に六回登場する(2・7、3・2、21、4・1、11)。この呼び方は、非常に重

要な問題が取り扱われる時に使われている。なお、直訳では「神に愛されている者よ」という意味である（永井訳参照）。

8 ヨハネはしばしば逆説的な表現によって、その重要なポイントを表現する。隣人や他者への愛を考えたこともない人は、自己愛のみで、自らを絶対化しているの
神を知るはずはないのである。神は愛である。「愛」には冠詞がついていない。神の愛は一つの特質としてではなく、本質そのものであることを示すものである。一方、「神」には冠詞がついている。このことは、神は愛であるが、愛は神ではないことを示している。

9 ヨハネ3・16を思い起こさせる個所である。この個所の原文の文頭は「これをもて神の愛は、我等のうちに顕あわれたり」（永井訳）の意味である。この個所の中心は、神の愛の顕れである。どこにも神の御手が見えない、神の御声が聞こえない、そのような中でも、神の愛はイエス・キリストにおいて歴史のうちに明らかにされているのである。この節に登場する神の愛は、自己犠牲の愛であり、他者の益になるための愛である。

10 9節同様、日本語の聖書では語順の逆転が起こって

いるが、本来の語順では、ここに愛がある が文頭にくる。神の愛とは、前節に示されているように自己犠牲の愛である。この自己犠牲の神の愛は、神ご自身の主導性の元に示された愛であり、御子を私たちの罪のあがない（なだめ、新改訳）の供え物としてお遣わしになったという先行する愛の行為に、神の愛を見るのである。

11 この手紙には、愛し合うべきである というように、何回かの命令形が登場する。しかし、これらはいずれも外的な強制による命令ではない。そうではなく、このようなキリストの愛を受け入れた者の内面からの応答によるのである。互に この言葉を、「キリスト者だけ」の意味に理解するのではなく、キリスト者の「囲いの外にいる者たち」への愛と理解したい。なぜなら、愛の模範は罪人のために死なれたキリストであり、私たちはキリストが愛されたように他者を愛するべきだからである。真の意味でのキリスト者の愛は、囲いから外へと出て行く愛である。

参考図書 ハワード・マーシャル「聖恵・聖書注解シリーズ1『ヨハネの手紙』」（聖恵授産所出版部）、レオン・モリス「愛 聖書における愛の研究」（教文館）他

聖書

Iヨハネ4・7〜11

タイトル

神様は愛なるお方です！

暗唱聖句

愛さない者は、神を知りません。神は愛

です。

Iヨハネ4・8

目 標

ひとり子を与えてくださった神の愛を知り、互いに愛し合う者となる。

導入

(飯田勝彦)

教会の牧師先生はどんな先生ですか？「優しい先生、面白い先生？」いつもニコニコしている先生？」。いろいろな答えがあることでしょう。決して一つの答えで言い表せないと思います。それは、四角形にも四つの面があるように、人にもいろいろな面があるからです。神様も一言では言い表せないお方です。今まで、神様はどんなお方だと聞いたでしょうか。そう、神様は天地を造られた神様、きよい神様でしたね。そして、今日も神様がどのようなお方が見てみましょう。

神様は愛なるお方です

神様は愛なるお方です。皆さんは「愛」と聞いてどのようなイメージを持ちますか？ 温かいイメージ、甘く

いハートのイメージでしょうか。

私たちの愛と神様の愛は違います。私たちの愛は、変わりやすい愛です。例えば、大好きな人であったとしても、喧嘩げんかしたら仲が悪くなって、気持ちが冷めてしまいます。でも、神様の愛は決して変わらず、私たちをいつも愛し続けてくださいます。皆さんは、「変わってしまいう愛」と「決して変わらない愛」のどちらで愛されたいですか？ 神様は、どんなことがあっても私たちを救ゆるし受け入れ、愛してくださるお方です。

神様の大きな愛

もし皆さんが、仲良しのお友だちと仲良しでないお友だちにそれぞれプレゼントをあげるとします。どちらのお友だちに良い物をあげるでしょうか？ 恐らく仲良しのお友だちの方に良い物をあげるでしょう。それは、私たちは愛する人に少し無理をしても、良くしてあげたいと思うものだからです。ですから、愛の大きさはその人に対する犠牲の大きさによって分かれます。

ある所に二人の男女がいました。二人は互いに愛し合っていました。でも、お金がなく互いへのプレゼントを買うことが出来ませんでした。ある時、男性は自分の

7月

16日 礼拝メッセージ例

大切にしていた懐中時計を売り、彼女に櫛くしを買いました。一方の女性は、大切な髪を切って売り、彼の時計につける鎖を買いました。互いにプレゼントを渡す時、彼女には彼の櫛を通す髪はなく、彼には鎖をつける時計はありませんでした。でも二人は、このことで互いの愛の大きさを確かめることになったのです。

では、神様の私たちへの愛は、どれほど大きなものでしょうか。それは、神様が愛する御子イエス様を十字架にかけるほどの愛なのです。私たち人間は、神様を無視して罪を犯してしまいました。そのまま行けば永遠の死に向かって行きます。愛である神様は、私たちが永遠の死に向かうことを決して望まれません。ですから、何とか永遠の死から私たちを救おうとされました。その方法として、永遠の死に行かなければならない私たちの身代わりとなってイエス様が死んで下さったのです。神様にとってイエス様の死はとても大きな犠牲だったのです。

ですから、十字架はただのアクセサリーではなく、神様の大きな愛の証拠であり、証なのです。

私たちを変える神様の愛

皆さんの中には、人を愛せないで悩んでいる人がいま

すか？ でも、神様はそんなあなたをも、大きな愛で愛しておられます。ですから、先ず神様の大きな愛を信じ受け取ってください。この愛を受け取る人は、神様の大きな愛が心の中に流れ込んで来ます。そうすると、心が愛で満たされ生き方に変えられます。皆さんが自分を愛することが出来るようになります。そして次に、神様の大きな愛をもつて家族や友だちを愛することが出来るようになるのです。たとえ、嫌だと思っている人であっても、感情ではなく愛を土台とした思いをもって愛する人に変えられます。これは神様の愛の力によってできる恵みです。

まとめ

神様の愛は、皆さんの心を生き生きとさせ、その人生を素晴らしいものにします。また、皆さんが神様の愛で多くの人を愛して行く時、その愛を受けた人も元気になります。神様の愛には、ものすごいパワーがあります。

私たちの周りは愛が冷えています。神様の大きな愛によって、互いに愛し合う者にされましょう。

♪大波のように♪

(ブレイズ&ワッシュアップ 63、讃美歌第二編171)

聖書 創世記7・1～24 テーマ ノアの箱舟

序論

(金井信生)

ノアが神の命じられるままに造った箱舟は、世界を滅ぼす大洪水からのただ一つの救いの手段でした。これは、すべての人を滅ぼす罪から救う唯一の道であるキリストの救いを、あらかじめ表す原型といえる出来事でした。ノアは信仰によって神に応答し、滅びから救われました。

一、滅びからの救い

神を畏れ敬うノアは、神が告げられた「わたしは…わたしの造ったすべての生き物を、地のおもてからぬぐい去ります」との言葉を聞き、恐れをいだき、信じました。

自然の災害に驚かされ、心を痛めることもしばしばですが、まことの神に背き、キリストを受け入れないなら、どんな立派な人でも「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」(エペソ2・1)なのであり、「あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びる」(ルカ13・3、

5) こと、「一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることが、人間に定まっている」(ヘブル9・27) ことを告げる聖書の厳肅な言葉を聞かなければなりません。

しかし、神の宣告の目的は、私たちを怖がらせるためではなく、救いに招くためです。おどすのではなく、キリストの十字架と復活を信じ、この滅びから先に救われた平安と喜びをもって真理を大胆に語らせていただきます。

二、神の備えられた救いの道

ノアは神が命じられるままに箱舟を造りました。また「箱舟にはいりなさい」と命じられて、従いました。世界を滅ぼすほどの大洪水に、人間の知恵や力は通用せず、神の備えられる手段を選び、定められた時に従うことが最善だからです。

ノアとその家族が箱舟に入ると、動物たちが「ノアのもとにきて」箱舟に入りました。先に神が箱舟を造るように命じられた言葉には「すべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて」(6・19)とありました。どうやって集めるのか、どの一

つがいを選ばばいいのかわかりませんでした。でも、言われたように箱舟を造りノアたちが中に入ると、神の御手が働いてちゃんと動物たちが連れてこられました。

十字架による救いも、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使16・31）と約束されています。いっとうやって救われるのは主に委ねて、まず福音に触れた「私」が信じ従っていくことです。あとは神がそれぞれに救いの道を備えておられます。

三、信仰による応答

「ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人」（6・9）でした。しかし、神はそれだけでノアを滅びから救うことをなさらず、箱舟を造ることを命じられました。ノアも神の言葉に従うことを通して、「神と共に歩む」姿を家族にもまわりの人にも示しました。

箱舟に入るときもそうです。まだ洪水どころか雨の兆候もない中で、主が命じられるまま箱舟に入っています。神を信じる、キリストを信じるとは、人を恐れないで、ただ神を畏れ、その言葉である聖書を信じることであり、

また神の言葉に従って生きることです。

ノアとその家族、そして動物たちが箱舟に入ると、（主は彼のうしろの戸を閉ざされた）。箱舟は防水のためにアスファルトが全面に塗られています。ただ一か所、外から人の手で塗ることができない戸は、主の手によって閉ざされました。私たちも主から知恵と力が与えられていますから、これを用いて日々の生活を守り、将来に備えています。しかし、最後は主に委ね、従っていかなければ、全き平安は訪れません。永遠に至る確信は、ただ主だけが与えてくださるものです。

イエス・キリストは、私たちに代わって十字架の上で罪のさばきを受けてくださいました。イエスを信じることは、滅びから救い出されて、これからは神の愛の御手に守られて歩み、やがて天の御国に迎え入れられる箱舟に入ることです。感謝してキリストの救いを受けましよう。

結論

私たちを永遠の滅びから救い、罪を清めてくださるキリストを信じ、救われた喜びの生涯に進みましょう。

研究資料

(小平徳行)

箱舟によるノア一家の救いは、イエス・キリストによる救いをあらかじめ示したものである。キリストが再臨について語られたとき、ノアの時代を例にあげて警告を与えられた(マタイ24・37〜39、ルカ17・26〜27)。

テキストト

1 あなたと家族とは ノアの家族も箱舟に入ることが許されたのは、ノアが正しい人であると神に認められたからであった。正しい人 ノアについては「正しく、かつ全き人」と紹介されている(6・9)。「正しい」とは人として神の基準にかなったという意味。「全き」とは、完全な、健全な、誠実な、という意味で、神に対して二心なく、誠実に信頼し、従う姿勢を意味する。罪のない完全ではない。

2 清い獣 清い獣と、清くない獣との区別は具体的に明示されていない。清い獣は種の保存のためだけでなく、いけにえのためでもあった(8・20)。七つずつ…二つずつ 新改訳、新共同訳では「七つがい…一つがい」。本文では「七」「二」と数字のみであり、「七つがい」と

も「七匹」とも解釈できる。清いものは、食用や供え物用であったため、多く必要であった。

3 空の鳥 ここでは清いもの、清くないものの区別はされていないが、8・20に「清い鳥」とあることから両者が区別されていたことがわかる。

4 七日の後 神の定めの際の厳粛な宣言であると共に、七日間の猶予でもあった。ここにノアの家族以外にも救われる可能性を与えた神のあわれみ、寛容がある(1ペテロ3・20)。四十日四十夜 文字通りの期間と考えよう。

5 5〜16 ここではノアが神から命じられたようにしたことで、ノアとその家族、動物たちが箱舟に入ったことが繰り返されている。これにより、この場面の重大さと厳粛さを印象付けている。

5 ノアはすべて主が命じられたようにした 箱舟を造る時から、家族とすべての生き物を箱舟に入れるまで、洪水の兆候は見られなかったであろうが、ノアは主に従い、すべてを信仰によって行った(ヘブル11・7)。

9 ノアのもとにきて 動物がノアに連れてこられたのではなく、自発的にノアのもとにきた。かつてアダムのもの

とにすべての生き物が連れてこられた時と同様に(2・19)、神の御手がそこに働いていた。

11 ノアの六百歳の二月十七日 洪水の始まりを正確に記そうとしている。このように日付を記すことにより、この洪水が事実であることを強調している。大いなる淵の源 巨大な地下水源と考えられる。この大洪水は豪雨だけでなく、何らかの地の変動により地下より水が噴出したことにもよることを示している。天の窓が開けて先の「大いなる淵の源」とあわせて、「おおぞらの下の水とおおぞらの上の水」(1・7)を連想させる。

13 その同じ日に：箱舟にはいった 神はご自身の民の安全が確保されるまではさばかれない(19・22参照)。

16 主は彼のうしろの戸を閉ざされた ノアの背後から戸が閉められた。箱舟の戸を閉ざしたのは主であることを強調している。これはノア家族の救いのための主の保護の御手であると共に、それ以外の者たちに対しては恵みの門戸が閉ざされ、救いの可能性がなくなったことを示す厳肅な瞬間である(マタイ25・10、ルカ13・25)。

20 山々は全くおおわれた 神は人間が逃れる場所を残されなかった。神が備えられた救いを拒むならば、他に

救いの道はない。

23 ぬぐい去られ (⊗)マーハー 地上の生き物はただ死んだのではなく、ぬぐい去られた。これは、「あるものを他のものから取り去る」という意味から、きよめるという意味にもなる。つまり罪を取り除いて地をきよめるとを強調している。6・7、7・4の成就。1ペテロ3・21では洪水の水は「バプテスマを象徴するもの」としている。つまり、洪水によって罪深い世界は葬られ、箱舟はその中に浮かび上がり、ノア一家は救われた。これは古き人がキリストと共に死にキリストと共に新しいいのちに生きる者としてよみがえることを象徴している。

ノアに対して箱舟に入るようにと言われたのは、罪人に対する神の招きの型である。キリストという箱舟はすでに用意されている。洪水の激しさは神のさばきの激しさを示している。しかしそれにも耐えられる箱舟はキリストによる救いの確かさを思わせる。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことば社)、パゼット・ウィルクス『創世記講演』、A. B. Simpson, 『The Christ in the Bible Commentary Vol. II』他

聖書

創世記7・1～24

タイトル

みんなで入ろう、救いの箱舟

暗唱聖句

あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。

目 標

箱舟なるキリストを信じ、その救いの中に入る者となる。

創世記7・1

導入

(後藤 真)

みなさんは、船に乗ったことがありますか。お客さんと自動車に乗せる大型フェリーは、お風呂もレストランもあって、とても楽しいですよ。聖書の時代にも、そんな今の大型フェリーと同じくらい、大きな船を作った人がいました。ノアです。

神様の決心

神様は、心を痛めていました。

「わたしを信じ、愛し合い、正しく生きてほしいと思って人間を造ったのに、人の心に思うことは悪いことばかりだ」。神様は人間を造ったことを後悔しました。そしてついに、この地上から人を滅ぼしてしまおうと決心しました。

けれども、神様はノアに心を留めました。神様は、ノアが神様の前に正しく生活していることをちゃんと見ていました。それで、ノアに大きな箱舟を作るように命じました。ノアと家族、そして動物たちを救うためでした。とても長い時間かかってノアが箱舟を完成させたとき、神様は言いました。

「あなたと、家族は箱舟にはいりなさい。動物たち、鳥たちも箱舟に入れなさい。」

ノアと動物たちが箱舟に入ったとき、神様が箱舟の戸を閉めました。それから40日。毎日毎日雨が降り続きました。雨はとうとう山の上をこえるまでに増えました。人も、動物も、箱舟に入らなかつたものは、だれも生き残ることはありませんでした。

ノアとノアの妻。ノアの三人の息子、セム、ハム、ヤベテ。そして、セム、ハム、ヤベテの、それぞれの妻。合わせて8人と、動物たち、鳥たち。箱舟に入ったものだけが残りしました。魚やかえるは箱舟には入りませんでした。水の中で生きられるものは、洪水になつてもだいいじょうぶだったのでしよう。

神様の命じられたように

ノアはすべて神様の命じられたとおりにしました。おどろくほど大きな箱舟を作るように言われたときも、そのとおりにしました。海から遠く離れた場所ので、箱舟を作っていたノアたちを笑う人たちもいたかもしれませんが。でもノアは神様の命じられたとおりにしました。

動物たちも神様が命じたとおりに、自分から箱舟に入りました。ノアは苦勞して動物を集めなくてすみませんでした。たった8人で、毎日毎日動物の世話をするのはとても大変だったでしょう。えさをやるだけでも一日が終わりそうです。でも、ノアは神様が箱舟に入れた動物たちを大切にお世話したに違いありません。

洪水が起こることも、箱舟に入って助かることも、全部神様の計画でした。ノアを洪水から救ってくださったのは神様です。ノアのがんばりで助かったではありません。ノアはただ、疑わないで、神様に従い、神様の救いを受け取ったのです。

みんなで入ろう、箱舟に

水で地上のものを滅ぼしたことは、神様にとつてとてもつらいことでした。人が心に思うことはよくないけれ

ど、こんなふうには世界を滅ぼすことはやめよう、と決めました。その決心を守り、二度とわたしたちを滅ぼさないですむように、神様はイエス様を十字架にかけてくださったのです。神様は、つらく苦しい思いをして、わたしたちを救おうとしてくださいるのです。

神様がこれほどまでにしてくださいる愛を、むだにしかくありませんね。わたしたちもノアがしたように、疑わないで、イエス様の救いの箱舟に入りたいと思います。イエス様を信じ、十字架の救いを信じて生きるなら、だれでも救いの箱舟に入ることができるのです。

ノアの箱舟には、ノアの家族8人しか乗りませんでしたが。でも、イエス様の救いの箱舟には、人数の制限はありません。100人乗ってもだいじょうぶ！ それどころか、世界中の人が乗ってもだいじょうぶです。

わたしたちも、みんないっしょに救いの箱舟に入りましょう。「わたしだけコツソリ乗ろう」「あの人にはいじわるされたことがあるから、誘わないでおこう」なんてケチなことは言いっこなしです。家族やお友達がみんなイエス様を信じるように、お祈りしましょう。

♪はこぶねにはいろいろ♪ (PW43)

聖書 創世記12・1〜9
テーマ アブラハムの旅立ち

序論

(金井信生)

カルデヤ（現在のイラク）のウルに住んでいたアブラハム（最初の名はアブラム）は、主の導きに従ってカナンの地（イスラエル）に移り住みました。主がアブラハムに与えられた祝福の約束は、その子孫がイスラエル民族となるだけでなく、救い主キリストがその中から誕生することです。つまり、神の救いのご計画は、主の言葉を信じ従ったアブラハムから始まっていきました。

主の言葉には「国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」という命令と「あなたを祝福」するという約束が組になっています。アブラハムは主の約束を信じて、命令にそのまま従います。後に「信仰の父」と呼ばれる生涯の第一歩でした。

一、父の家を離れて

「父の家を離れる」とは、目に見える財産に頼らないで、主の言葉だけに従うということです。アブラハムは

ウルのと町にとどまっていれば、不自由なく暮らすことができたでしょう。しかし、アブラハムが求めたのは、目に見える財産を受け継ぐことではなく、神から祝福されることでした。実際、アブラハムは、移住したカナンの地で生涯家を建てることなく、天幕住まいでした。地上の宝ではなく、「神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していた」（新共同訳 ヘブル11・10）からです。アブラハムに続いて記されるイサクやヤコブ、またヨセフもそれぞれ、父の遺産ではなく神の祝福を求めて主に従いました。

私たちも文字通りの財産や、時には信仰の遺産を受け継ぐこともあります。しかし、いづれにしても主が「私を祝福しようとしておられる」ことを信じて、待ち望み、み言葉に従う信仰があるでしょうか。

二、わたしが示す地に行きなさい

これも、アブラハムが自分の願いや考えではなく、ただ主の導きに従ったことです。カルデヤ地方は豊かな土地で、その当時、世界の最先端を行く文明・文化の地です。それに比べればカナンは辺境で、人も少ないところ

です。それもアブラハムは「カナン之地」と初めから示されたのではなく、「行く先を知らないで出て行った」（ヘブル11・8）のです。どこに導かれるかが問題ではなく、「わたしが示す地」であれば、どこでも従ったのがアブラハムの信仰です。

わたしたちにとっても、主が示される地とは、豊かであるか、楽かどうかよりも、主が共におられるところであり、やがて帰るべき天の御国への途上にあると確信できるところです。聖書に出てくる信仰者たちは、主と共にいてくださることを、何よりの祝福と受け取り、地上では「旅人であり寄留者」であることを自ら言いあらわし、「天にあるふるさと」を熱望していました（ヘブル11・13～16）。

三、祭壇を築いて、主の名を呼んだ

アブラハムは、カナンへの移住後も何度か住むところを変えますが、いつも、まず祭壇を築き、礼拝をささげています。

この礼拝の姿から教えられるのは、「祝福されたから礼拝する」のではなく、「約束を信じて礼拝する」という

ことです。（あなたを大いなる国民と）すると言われても、アブラハムの正統な子どもはただ一人であり、一つの民族が生み出されるまでには数百年かかりました。またキリストの誕生までは千数百年もたっています。「望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認する信仰」、これもまた神からの祝福です。

また、祭壇を築くのは、主の臨在が確かであり、身近であるので、礼拝を第一にし、主体的に献^{ささ}げる姿です。「すべて主の名を呼ぶ者は救われる」（ヨエル2・32）。主の約束は、アブラハムから始まりました。主は今も、一人一人の名を呼んで「あなたを祝福する」と約束してくださっています。目に見える富に惑わされず、主からの祝福に満たされた生涯に進みましょう。

結論

まことの神を知らないこの世は、自分の利益ばかり求める罪の世界です。その中において主の声を聞き、従って、祝福された生涯に進みましょう。

研究資料

(小平徳行)

聖書全巻に貫かれている中心的なテーマの一つは「聖別する神」である。バベルの塔以降、再び罪と混乱に陥った人類を神の救いの恵みに導くために、神はアブラムを聖別された。救いの出来事は神の言葉と人間の信仰と従順によって形づくられる。1〜3節はアブラムの召命、4〜9節は彼の従順について記されている。

テキスト

1 時に主はアブラムに言われた この命令と約束は、使徒7・2〜3によると、彼がハランに住む以前のウルに住んでいた時に語られたことになる。しかし4節によればハランで語られたと考えられる。以上からアブラムがすでにウルで与えられていた命令をハランで再び示されたと考えてよい。**あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ** この命令は徹底した分離を要求している。父の家を離れ土地を手放すとは、生活の保証を手放すことを意味しており、信仰のテストであった。**わたしが示す地** カナンの地の方向であることは分かっていたが、アブラムにとって未知の地であった(ヘブル11・8)。

2 アブラムに対する約束は、アブラム(の子孫)が大きな民となること、そして地上のすべての民族がアブラム(の子孫)によって祝福されることである。**大いなる**数だけでなく、神の前の偉大性も意味している。**国民(ヘ**ゴイ) 領土と民を含む言葉。一般には異邦人の国々を指すが、ここでは特に他民族と比較してイスラエルの国の偉大性を語るために用いたと考えられる。**祝福の基**となる アブラムへの祝福は、彼だけのものではなく、彼を通して多くの人々に及ぶ。

3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し 人々がアブラムをどのように扱うかによって、彼らの定めが決まってしまうような立場にアブラムは置かれることになった。**地のすべてのやからは、あなたによって祝福される** これは後に、キリストを信じるすべての者(異邦人であっても)が義と認められ、この祝福が及ぶことをあらかじめ示したものである(ガラテヤ3・8)。

4 主が言われたように アブラムの単純率直な従順を表現している。故郷、親族から離れ、行き先が不明確な中で従うことは困難なことである。それにもかかわらず従ったのは、やみくもな行為ではなく、最善をなさる神

への信仰によるものであった。アブラムは現在また将来の生活の保証のすべてを主の御手にゆだねたのである。ハラン 「カラン」(使徒7・2)とも言われている。メソポタミヤの都市で商業の中心地、ウル同様、月神を主神とする偶像崇拜の地であった。アブラムの父テラも偶像崇拜を行っていた(ヨシユア24・2)。

5 すべての財産：携えて もはや戻ることはないという決意の表れ。

6 その地を通って アブラムの旅は、まずカナンの地の中部にあるシケムまで入り、さらにベテルとアイの間を通って(8)、南の極限ネゲブまで及ぶ(9)。ヨシユア24・3において、主によってアブラムが「カナンの全地を導き通」ったと言われている。カナンの全土がアブラムに与えられることとし(13・17参照)。**シケム** シケムはゲリジム山とエバル山の間の谷間にある要地。**所**(**ヘ**マーコーム) 本来は単に「場所」を意味するが、文脈によって特別な意味を持ちうる。新共同訳では「聖所」と訳されている。**モレ** 「占うもの、導くもの」の意。**テレビンの木** 新改訳、新共同訳では「樅の木」。樹齢、数百年〜千年で高さ15メートル位まで成長する。神

木としてカナンの祭儀の中心であったといわれる。アブラムはカナンの宗教の拠点に祭壇を築き、真の神の臨在を示したのである。**カナンびとがその地にいた** カナンの地は無人の野ではなかった。

7 あなたの子孫に この「子孫」は単数形で、単数の意味にも、複数の意味にも用いられる。これはアブラムの子孫であるユダヤ人を指すが、究極的にはイエス・キリストを指す(ガラテヤ3・16)。「この地を与えます」「わたしを示す地」(1)がここであることを示す。カナンびとがすでに住んでいたことは、神の約束を疑わせるものとなり得たが、神はアブラムを励ますために約束を更新し、強調した。**祭壇** 約束の地において最初に築かれたのは礼拝の場であった。

8 天幕 地上にあつては旅人、寄留者としてテント暮らしをした。この世は安住の地ではない。これは祭壇と共に彼の生涯を象徴するものである。

9 ネゲブ 「南」と訳されているものもある。現在の死海の南西に広がる乾燥した高地。約束の地の南限。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』、小畑進「創世記講録」(以上のちのことば社)、他

聖書 創世記12・1～9

タイトル さあ、出発だ！

暗唱聖句 あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。

創世記12・1

目標 罪から離別し、神の導きに従って生きる者となる。

導入

(後藤 真)

結婚したり、会社で働き始めたり、学校に進んだり。わたしたちもいつか、そんなことをきっかけに、住み慣れた家を出て新しい暮らしを始めるかもしれないですね。今日のお話は、そんなふうに住み慣れた町から出て、新しい土地に出ていった人、アブラムのお話です。

神様のことば

神様は、アブラムに言いました。

「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるだろう。」

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される。」

神様は、アブラムを選び、アブラムから生まれる子孫を増やし、一つの国にすることに決めたのです。そしてアブラムとその子孫の国を通して、世界の国の人々を祝福する、このことです。これは、神様のことを思わないで悪いことばかり考える人間を、洪水で滅ぼすのではなく、救い、祝福するためでした。そのために神様はアブラムに新しい土地に行くように命じたのです。

アブラムの心配

みなさんがアブラムだったらどうですか？

「ハイ、分かりました。いますぐ出発します」

と言えますか。そんなに簡単には言えないような気がします。まず、アブラムは75才でした。新しい土地に行くって新しい生活するには、もう少し若いときの方が良いように思います。引っ越しだつてとても大変です。だいたいアブラムが住んでいたハランは、大きな川があり、作物もたくさんとれ、とても豊かな土地でした。神様が行くようにというカナシが、住みやすい土地かどうか分

かりません。

それに、カナンの土地には、もともとそこに住んでいる人がいます。アブラムたちが行って、「ここに住みますよ」と言っても、来るなど言われるかもしれません。アブラムひとりが行くのならいいかもしれませんが。でも、家族も召使いも、家畜もみんな行くのですから、とても広い土地がいます。

また、アブラムには子どもがなく、子孫が増えるようには思えません。長い間ハラシに住んでいたアブラムは、お父さんのテラが、本当の神様ではなく、月の神様を拜んでいることも知っていました。そんな自分に、神様が話しかけて、こんな大きなことを約束するなんて、とても信じられないことだったでしょう。

主が言われたように

それでもアブラムは、神様が言われたように、出発しました。妻のサライ、おいのロト、すべての財産、家畜、召使いたち。すべて持って、住み慣れたハラシを出発したのです。それは「もうハラシには戻らないぞ」という決心のあらわれでした。アブラムの心配がなくなったわけではなかったでしょう。でも、アブラムの心には、た

だ神様を信じる気持ちがありました。神様なら、こんなびつくりするような約束をその通りにする力がある。神様は、かならずいちはん良くしてください。だから、神様についていこう。そう思ったのではないのでしょうか。

「アブラムは特別に立派な人だから神様についていたのだ。ぼくには無理だ」と思う人がいるでしょうか。そんなことはありません。アブラムは、大きな失敗をしたり、神様を疑ったりしてしまいます。でも、神様は、そんな欠点があるアブラムを導き、訓練して成長させます。そしてアブラムは「アブラハム」と名前が変えられ、「信仰の父」とまで、呼ばれるようになるのです。

わたしたちも、神様についてゆくことができます。自分の思い通りにしたい気持ちや、礼拝よりも遊びに行く方が楽しいなあという思いがあるかもしれません。それでも、神様について行きましょう。神様はわたしたちを通して、神様の祝福をまわりの人に分かち合いたいと願っておられるのです。そしてそれができるようにわたしたちを成長させてくださるのです。

♪歩こうイエスの道を♪ (PW15、イン81)

聖書 創世記26・12～22 テーマ 信仰による柔和

序論

(福井文彦)

神は飢饉ききの時に、イサクに対してエジプトへ行くなと命じられ、従ったイサクを祝福されました。ところが寄留者イサクがあまりに繁栄するので、土地のペリシテ人の妬みねたを買い、彼らはアブラハムが掘った井戸をふさぎ、迫害します。その後にも移ったゲラルの谷で同じようなことが起こります。そこでイサクは信仰の柔和をもつてさらに移ります。神はそのイサクを祝福されたのです。

一、主の祝福と試練

飢饉があつたにもかかわらず、イサクがその地（ゲラルのアビメレク王の地）に種をまくと、その年百倍の収穫を得ました。このような収穫は考えられないことであり、まさにこれは主の特別な祝福でした。これはリベカのことでの失敗をイサクが悔い改めた証拠であり、主の恵みでした。

このようにしてイサクは豊かになり、ますます富み栄えました。富は時として人々の妬みを招くことがあります。

す。この場合もそうでした。ペリシテ人たちはイサクの富み栄えるのを見て、妬みました。彼らはイサクからその理由を聞いて、その信仰に倣まねうのではなく、妬んで迫害したのです。

そこで彼らは、イサクの父アブラハムがしもべらに掘らせた井戸をふさいでしまいました。この当時、井戸を掘るといことはなかなか大変ことであり、この井戸を中心に生活が営まれていたのです。井戸の水を人が飲むだけでなく、家畜も飲みますから、井戸をふさぐという事は、大きな迫害でした。ペリシテ人たちは、この井戸をふさぎ、その土地から去らせ、イサクに与えられた祝福をとどめようとしたのです。

二、イサクの柔和

その土地の人々は、先代の王がアブラハムとの間に立てた契約（21・22～30）を無視したのです。そしてイサクにその土地を去るように要求しました（16）。彼は争いを好まぬ人ですから、一言も抗弁せず、すぐそこを去り、ゲラルの谷へと移りました。

そこでイサクはアブラハムの時代に掘られ、その後ペリシテ人がふさいだ井戸を新たに掘り直したのです。と

ところが、ゲラルの羊飼たちが（この水はわれわれのものだ）と主張すると、イサクはまたそこを去りました。

そこでもまた井戸を掘りました。ところがそれについても争いが起こり（21）、イサクはそこからも移ってほかの井戸を掘ったのです。彼は次々に譲歩して、決して争うことはしませんでした。

井戸を掘ることが容易なことではなかった当時、イサクは争いを好まず、ほかの人に譲歩できる人でした。このようにイサクは、確かに信仰による柔和な人でありました。

三、信仰による柔和

主イエスは山上の説教で、「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつくぐであろう」（マタイ5・5）と教えられました。

国語辞典は、「柔和」を「やさしく、おだやかなさま」とげとげしい所のない、ものやわらかな態度・様子」と説明しています。では、イエスが言われた「柔和」とはどのような意味でしょうか。

①神に対して謙虚であることです。神の摂理に対して恨みませんし、不平を言いません。また反抗することな

く、自暴自棄にならず、失望しません。神の摂理に対して静かに耐え忍ぶのです。

②いつも神のみこころに対して従順に従います。ヨセフは兄たちに売られてエジプトに行つて苦勞し、言うことのできないようなくやさしきで胸がつぶれるような環境の中におりましたが、一言も不平を言いませんでした。

③柔和は御霊の実の一つです（ガラテヤ5・23）。柔和な人は、他人に対してなごやかな優しい態度が現われます。優しいことばで語り、不当な取り扱いを受けても、耐え忍んで喜んで、受け入れます。他人に寛容、温和で、自分を誇大評価しませんし、自己主張もしません。尊敬され、敬われることも期待しません。

イエスはご自身の柔和にふれられましたし（マタイ11・29）、主の柔和のクライマックスは、十字架の上で表されました（1ペテロ2・22〜23）。

結論

イサクが神に祝福されたのは信仰による柔和によるのです。私たちも最も柔和であられた主イエスを仰いで、柔和を学び、神に聞き従い、聖霊に満たされ、神の祝福にあずかりましょう。

研究資料

(宮澤清志)

今週与えられている聖書の個所を理解するには、それまでの背景をも同時に理解する必要がある。イサクも、

アブラハムと同じ契約を受け継ぐためには、やはり父アブラハムと同じように訓練され、訓練を通される必要があった。当時、飢饉きんげんのときにはエジプトに下るのがごく自然のことであったし、現にアブラハムもそのようにした(1、12・10)。しかし、アブラハムのときとは異なり、主は「エジプトへ下つてはならない」(2)と仰せられたのである。主の解決方法は、人物や時代により異なる。人間的にはどんなに安全で確かな方法と見えたとしても、神の御心のみが唯一の祝福への道である。だから、ここでも「主が最善を備えてくださる」という信仰が試されているのである。その結果、イサクは「この地にとどまる」(3)ようにという主の命に従って、ゲラルの地に留まる決心をする。

しかし、そこでやはり父アブラハムと同じあやまちを犯すのである(8・11、12・10)。このことは、父アブラハムの弱さがその子イサクにも臨んだことを示してい

る。それは、罪の性質がその子に伝わることを示すと同時に家庭環境の大切さをも示す実例でもある。しかし同時にこのような失敗を通して、自らの弱さと主のご介入を学ぶことは意味のあることである。

テキスト

12 エジプトへ下るな、という神の命令(2)に従った結果、イサクは神が約束された祝福(3)に与あずかることになる。当時、イサクの身の上に起こった飢饉(1)がどの程度のものなのかわからないが、その飢饉の結果、イサクは「地に種をまく」という行動に出たのであろう。

その地 ゲラル(1、6)。**得た**(へ)マーツァー)新改訳聖書では「見た」とある。この言葉は、種をまいてから世話をして収穫をする、という現代の農業のあり方ではなく、種をまいたらあとは収穫の時に行つてその収穫を見るという程度の農業のあり方を指している。**百倍の収穫** 豊作の年の妥当な収穫量であったといわれている(マルコ4・8参照)。しかし、この祝福は、「主が彼を祝福された」とあるように、明らかに神の恵みによるものである。

14 羊の群れ、牛の群れ及び多くのしもべ 12節の収穫

以上に、この言葉はイサクの真の職業が牧畜中心であったことを示している。羊や牛の群れが増えた結果、多くのしもべを雇う必要が生じたのであろう。

- 15 この節以降、「井戸」が中心的な役割を担っている。驚くほどの穀物を得(13)、多くの羊や牛の群れを養い(14)、そして多くのしもべとともに生活したイサクにとつて、水は生命の源であつたに違いない。井戸はすなわちその生命の源としての役割を果たしていたのである。父のしもべたちが掘つたすべての井戸 アブラハムの掘つた井戸については、既にその当時のアビメレクとの間に正式に合意ができている(21・27、30〜31参照)。
- 16 イサクの祝福と、その祝福へのペリシテ人の妬み(なだ)の結末は、ついにはイサク追放という事態にまで発展する。あなたはわれわれよりも、はるかに強くなられたからペリシテ人にとつて、イサクは脅威に映つたのであろう。
- 18 アビメレクにより追い出されたイサクは、ゲラルの谷に移住した。そこで アブラハムの時に 掘つて埋められた父の井戸を再び掘つたのである。それは、イサクが多くの家畜の群れを所有しており(14)、その家畜を養うためには多くの飲料水を必要としたからであらう。ま

たこの井戸がアブラハムの井戸であるがゆえに、自らが使用する正当性もあると考えたようである。

20 エセク 「争い」「論争」という意味。しかし、直接的にはイサクではなく、イサクの羊飼いたちとゲラルの羊飼いたちとの間の争いであつた。

21 シテナ 「敵対」「敵意」など。20節での命名では、どちらかといえ目に見える形での「争い」であつたのに対して、今回の命名では、そのような目に見える争いの背後にある感情、あるいはその争いの根底にある部分^が命名の対象となつていると考えられる。

22 レホボテ 「自由の地」「広々とした地」「場所」「余地」という意。どこにいつても不和と衝突とを繰り返してきたイサクにとつて、衝突から解放され、広々とした地に到着できたことは、神の恵み以外の何ものでもなかった。旧約における救いの概念のひとつは「囲みを解かれる」ということである。この経験はイサクにとつても救いとなつたに違いない。

参考図書 デレク・ギドナー 『ティンデル聖書注解 創世記』、小畑進 『創世記講録』(以上いのちのことば社) 他

聖書

創世記26・12〜22

タイトル

平和をつくり出す人になろう！

暗唱聖句

柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。マタイ5・5

目標

神に信頼して、柔和な生き方を身につける。

導入

(松浦みち子)

今日は忘れてはならない大切な日です。何の日か、分かりますか？ 広島に原子爆弾が投下され多くの人の命が奪われた日ですね。歴史を学び、わたしたちはどう生きるのか、を考えることはとても大切な事です。そして平和をつくり出す者となるために、みことばに耳を傾けましょう。

立ち退きをせまられるイサク

アブラハムのひとり息子イサクは、父の跡を受け継いで羊を飼って生活していました。ところが、その地方にまた飢饉きんげんが起ったのです。以前の飢饉の時、アブラハムはエジプトに下って行きましたが、神様はイサクに「エジプトに下ってはならない。わたしがあなたに示す地

とどまりなさい。そうするなら、わたしはあなたと共にいて、あなたを祝福する」と語られました。ゲラルのペリシテ人の王アビメレク王は、イサクたちに住むことをゆるしてくれたので、さっそくイサクは種をまきました。するとどうでしょう。その年の内に、百倍の収穫を得ました。また、羊の群れ、牛の群れ、多くのしもべを持つようになつて、イサクは非常に裕福になりました。神様が祝福してくださったのですね。

ところが、イサクが裕福になつたのをねたんだ周りのペリシテ人たちが意地悪をするようになりました。アブラハムのしもべたちが苦勞して掘つたすべての井戸をふさいで、土で埋めてしまいました。井戸は畑のためにも羊や牛のためにも必要な水の源です。しかも、好意的だったアビメレク王も「われわれの所を去ってください」と立ち退きを迫ってきたのです。さあ、困ったことになりました。イサクはどうしたでしょう。イサクは争うことなく、その地を去って行きました。

柔和な人イサク

イサクたちは、人里はなれた谷に天幕を張ってそこに住みました。そして、以前父アブラハムが掘つて、壊さ

れてしまっていた井戸を再び掘り起こしました。すると、水が湧き出てきたのです。「やったあー、水だよ！」とみんな大喜びしました。しかし、喜びもつかの間、ゲラルの羊飼いたちが湧き出る水を見つけ、やってきて「この水はわれわれのものだ！」と言って、イサクの羊飼いたちと争って奪ってしまいました。イサクはこの井戸をエセク（言い争い）と名付けました。イサクはあきらめることなくまた一つの井戸を掘りました。すると、また羊飼いたちがやってきて、争って奪ってしまいました。イサクはその井戸にシテナ（言いがかり）と名付けました。それで、イサクはそこから移ってまた一つの井戸を掘りました。今度は羊飼いたちは奪っていきませんでした。そこでこの井戸をレホボテ（広々とした所）と名付けました。そしてイサクはこう言いました。「いま主がわれわれの場所を広げられたから、われわれはこの地にふえるであろう。」イサクは決して争うことなく隣人との平和を求め、自分はいつも身を引いていきました。いくじなしのように見えるかもしれないが、イサクはどんな時も神様が共にいてくださることを信じ疑いませんでした。そんなイサクを神様は豊かに祝福してくださいました。

ある日、かつてイサクを迫害し追い出したアビメレク王とその友人、軍勢の長がイサクのもとにやってきて、「まことにあなたは主に祝福された方です。」と行って、イサクと平和条約を結ぶことを申し出ました。イサクは彼らのためにご馳走ちそうをふるまってもてなし、平和の契約を結び、穏やかに去らせました。「柔和な人たちは幸いである。彼らは地をうけつぐであろう」（マタイ5・5）と、イエス様が教えてくださったように主に信頼する者を、主は祝し、勝利を与えて下さるのですね。

ちよつと考えてみよう！

今日のお話を聞いて、ちよつとまって！と思いませんか。私たちは人に意地悪されたら悔しくなって、仕返ししたくなります。悪魔は「仕返しをする心」を植えつけて、世界中を憎しみと争いの世にしようと働いています。私たちはそんな、悪魔に負けることなく意地悪する人に優しくし、ぶたれても仕返しをしないで本当の勝利を勝ち取りましょう。神様を信じて一生懸命お祈りしてごらん下さい。必ず悪魔に勝つ力を神様はくださいます。柔和な人となって、暗い世を輝かす光の子になりましょう。

♪ひかりひかり♪（こ52、ふ83、ホ109）

聖書 創世記28・10～22

テーマ 天からのほしご

序論

(高橋頼男)

ヤコブは、母リベカと共謀し、老いた父イサクを偽って、ついに兄エサウから長子の特権を奪い取ってしまいました。だまされたイサクは怒りにふるえ、エサウは泣き叫んで、失った長子の特権を求めましたが、一度ヤコブに渡った祝福はもはや移り変わることはありません。エサウはヤコブを深く憎み殺そうと決心しました。それを知った母リベカは、ヤコブを遠いパダンアラムの地に逃れさせました。

一、孤独な旅(1～5、10～11)

母と別れ、故郷を離れ、悲しみと不安を胸に抱いて一人旅するヤコブの心は、まことに切なくわびしいものでした。いまさらながら、兄に対する恐れ、老いた父を欺いた悲しみ、溺愛してくれた母の懐かしさが次々に思い起こされて込み上げてきます。ヤコブもこれまでの自分の悪事を思わずにはいられません。「自分は何か悪いことをしてきたのだろう」。初めて、悔いのこころ

が起りました。これからどうなるのだろうか、将来に對する不安が襲ってきました。そして、今、まさに自分はひとりぼっちであることを思い知らされたのです。忸怩たる思いで、ひたすらさみしく心細く、石を枕にいつしか眠りにつきました。

二、神との出会い(12～17)

眠りに落ちたヤコブは、その夜、一つの夢を見ました。それは不思議な夢でした。一つの梯子が天から地にまでくだって立っていました。その上を神の御使いたちが上り下りしているのです。その光景の中から、ヤコブ自身に語りかける主の声が聞こえてきました。(わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。)その瞬間、ヤコブはこれまで伝え聞いていた祖父アブラハムを祝福した神、父イサクに現れた神を思い起こしました。その神が今、ヤコブにも現れてくださったのです。「ヤコブよ、お前は恐れ悲しみつつ、たったひとりで不安な旅を続けている。しかし、お前は一人ではない。わたしはお前と共にいる。お前がどこに行くにも、共にいてお前を守る。わたしは、決してお前を見捨てはしない」。思いがけない神からのことばは、慰めに満ちたことばで

した。この経験はヤコブにとって大きな転換点となりました。「わたしは知らなかった。そうだ、わたしは一人ではなかったのだ。こんなわびしい、一人ぼっちの愚かな自分に、主はその御目を注いでくださったのだ。こんな者と共にいてくださったのだ」。ヤコブの霊の目が開かれた瞬間でした。今まで恵まれた環境の中で育ち、自分を愛し守ってくれる人々の中で自由に思いのままに生きて来たヤコブでした。兄を出し抜いて長子の特権さえ手に入れたのです。しかし、今、追われるようにして故郷を後にして、一人、孤独な旅の中で初めて知ったのは自分の本当に醜い罪深い姿でした。しかし、このような自分に対して、神はみこころを留めてくださり、共にいてくださるといいます。「ヤコブの神との出会い」こそ、新しいヤコブの誕生の瞬間でした。

フランスの哲学者ブレイズ・パスカルは、多くの思想遍歴の後、ついに自分の神を見出したのです。その時、彼は「『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』、哲学者や、学者の神ではない。確かだ、確かだ、心のふれあい、よろこび、平和、イエス・キリストの神」と、歓喜の叫びをあげました（パンセツ737・4〜6、田辺保訳）。

三、ベテルの経験（18〜22）

人生は、人間の目から見ると、偶然や不思議に満ちています。ヤコブは故郷を追われ、孤独な旅の中で野宿するという状況で、「こんなところで、こんな自分のために、神が共におられる」という驚くべき恵みを見出したのです。「神が共におられる」ということ、これこそ、すべて悲しむ人、孤独な者、自分の弱さを知らされる人、罪を思い出して自責の念にかられ思い悩む人にとって、真の救いです。ヤコブは、今や「わたしの神」となってくださった主を恐れかしこみ、その体験の場所に石の枕を立てて油を注ぎ、天の門と呼び、ベテル（神の家）と名づけました。「神われらと共にいます」は、私たちの救いそのものです。そして、主イエスこそ、私たちのインマヌエル（マタイ1・23）です。様々な状況や出来事の中で罪深い自分を知らされ、そこでキリストの救いを知ることこそ、わたしのベテルの経験です。

結論

こんなところにと思われる場所に、共におられる神に目を上げていきましょう。

研究資料

(小平德行)

ヤコブは父イサクを欺いて兄エサウの祝福を自らのものとした(27章)。そのため母リベカはエサウに命を狙われたヤコブを逃がすために、妻をめとるためという口実でハラシへと行かせた。ヤコブはその孤独な放浪の旅路において神に出会うのである。これは彼にとつて最初の個人的な神との出会いの経験であった。

テキスト

10 ハラン ベエルシバからベテルを通り、ハラシまでの旅路は八百八十キロ以上になる。

11 一つの所に着いた時 「着いた」(ハ)パーガ)は「遭遇した」「出会った」という意味で、偶然の意味合いの強い言葉。人間的には偶然と思えることも神の側からは必然である。

12 ここには「見よ」と訳せる言葉が二回使われている。つまり、夢の中で見た幻は驚くべきものであった。一つのはしがが地の上に立っていて 「はしが」(ハ)スーラーム)は語源的には「積み上げる」(ハ)サーラル)から来ていることから、高速道路のランプのような傾斜した道か、

階段のようなものともとれる。ここで重要なことは天と地を結ぶものであるということ。新改訳では「地に向けて」、新共同訳では「地に向かつて」。これは地からのものではなく、天からのもの、つまり、人からの接近ではなく、神からの接近であることが強調されている。神の使たちがそれを上り下りしているのを見た 御使いは救いを受け継ぐ人々に奉仕する者であるから(ヘブル1:14)、この光景は神がヤコブを保護されることの約束(15)の保証を暗示するものである(詩篇34・7参照)。また、このはしがは神と人とを結ぶ道であるキリストの予表でもある(ヨハネ1:51参照)。

13 主は彼のそばに立って言われた 主の臨在への気づきは、主の御声を聞くことから生まれる。ここでヤコブが契約の継承者であることが確認される。

14 15 ここには子孫の繁栄、子孫による地上のすべての民族の祝福についての約束がなされている。これはアブラハムやイサクにも約束されていた事である。それに加えて、主がヤコブと共におられること、主は約束を成し遂げるまで決して見捨てないことが示されている。実際にその後ヤコブの歩んだ道のりは険しいものであり、

約束が成就するまで、主の臨在は不可欠であった。主が共におられることこそが契約の根本であると言える。

16 まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。家を離れ、今まで親しんできた礼拝の場所を離れ、非常に孤独感を感じている時に、この予期しない所で主の臨在を知った驚きが表れている。利己的な罪深い自らをも顧みてくださり、共にいると約束してくださった主の恵み深さへの驚きでもあろう。

17 神の家 神の臨在の場所。人生の旅路のどこにでも神と対面する「神の家」がある。天の門 神の臨在に触れることが許された場所を示す表現。

18 石を取り、それを立てて柱とし、その頂に油を注いで 石そのものを神格化したのではなく、神がヤコブに現れ、アブラハム、イサクへの約束を引き継がせてくださったことを証する記念碑として。油を注いで 契約あるいは誓いが神聖であり、冒すことのできないものであることを表す象徴的な行為。

19 その所の名をベテルと名づけた アブラハムはベテルで二度祭壇を築き、礼拝している(12・8、13・3)。アブラハムの時代の記事に「ベテル」を用いているのは、

後に名づけられた地名で説明しているため。ヤコブは、ここがかつてアブラハムが祭壇を築いて礼拝した場所であることを知らなかったと考えられる。このような場所に導いて、同じように神の名を呼ばせることに神の摂理を見る。

21 安らかに父の家に帰らせてくださるなら、主をわたしの神といたしましょう 新改訳第三版では「無事に父の家に帰らせてくださり、こうして主が私の神となられるなら」(新共同訳もほぼ同じ)となっている。いずれにしても22節のヤコブの誓いを果たすための条件のような形で書かれている。しかし、これは疑いを含んだ言葉ではなく、神の約束に基づいての誓願と取るべきであろう。新改訳第二版は「私が無事に父の家に帰ることができ、主が私の神となってくださるので」と、ヤコブが約束の実現を確信し、先取りしたように訳している。

22 十分の一 所有物の聖別である。ヤコブの場合は、律法によるものでなく、自由意志によるささげものである。アブラハムにならったのかもしれない(14・20)。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約I』(いのちのことば社)、G. J. Wenham (Word) 他

聖書

創世記28・10〜22

タイトル

神様といつもいっしょ！

暗唱聖句

まことに主がこの所におられるのに、わたしは知らなかった。 創世記28・16

目標

共におられる神に目を向けて生きる。

導入

(和田 治)

みなさんは、「ひとりぼっちになっちゃった…どうしよう！」っていう経験があるかな？ ちょっと想像してみて下さい。家族からも友だちからも、先生からも誰かだれからも別れて、一人ぼっちになったとしたら、どんなにさびしい事でしょうか？。実は、今日のお話の主人公のヤコブはまさにひとりぼっちで、途方に暮れていたのですね。ヤコブの気持ちになって考えてみましょう！

ひとりぼっちになったヤコブ

実はヤコブは、お兄さんのエサウからうまく長子の特権、つまりお兄さんだから持っている特別な祝福を、奪い取りました。今度は、お父さんのイサクがエサウに祝福の祈りをしようとしたとき、お母さんと力を合わせて、エサウのふりをし、お父さんをだまして祝福を横取りし

たのです。かんかんに怒ったエサウ。「くそっ！二度も俺をだましやがって！ おやじも長いことはない。そうになったら見てろ、ヤコブのやつ、必ず殺してやる！」そうなつてはたまりません。ヤコブはお母さんのはからいで、遠く離れた町、お母さんの故郷に逃げるようになりました。ハランというその町は、これまで住んでいたベエルシバから900キロほど、日本でいうと東京から本州の西の端の下関くらい離れているんです！ 初めて一人で家を離れ、ひたすら歩き続けるヤコブ。もう、心細くて寂しくてたまりません。気がつくと思知らぬルズという町にきていました。誰も知っている人がいない所。もう夜です。疲れ果てたヤコブは野原で横になるしかありませんでした。「お母さん！」涙がほほをつたって、石の枕をぬらします。しかも、「エサウ兄さんの使いが追いかけて来たらどうしよう！」そう思うとますます怖くて、悲しくてたまらなくなるのでした。なんて惨めな夜でしょう。

主は共におられた！

やがてヤコブは眠りにつきました。すると、夢の中で一つのはしごが見えたのです。それは、天から地へとく

だる、とつてもながくいはしごでした。天使がそのはしごを上り下りしています。そしてなんと、その夢の中で主の声がはつきりと聞こえてきたのです。「ヤコブよ、わたしはアブラハムの神、イサクの神である主だ。お前は恐れ悲しみながら、たったひとりでさびしく不安な旅を続けている。だが、お前はひとりぼっちではない。私がいつもお前と共にいる。お前がどこに行くにも、いっしょにいて、お前を守る。わたしは、決してお前を見捨てない！」。何という慰め！ 何という励ましでしょう！

「本当に主がここにおられるのに、私は知らなかった！」。今、ヤコブには分ったのです。「そうだ、私は一人じゃなかったんだ。こんな私さえ主は見つめ続けていくのださり、共にいて下さったんだ！」ヤコブの心目が開かれ、今まで見えなかった主に目を向けることができるようになったのです。彼の心はこれまでにない本当の喜び、平安、希望に満ち溢れてくるのでした。

共におられる主に目を向けよう！

夢から覚めたとき、ヤコブは共におられる主の語りかけをがっちり受け止めて、心の目を主に向けました。あなたも、「神様の声なんか聞こえないよ」って思ったこと

がありませんか？ いいえ、たった今、聞こえているじゃないませんか！ この聖書のお言葉こそ、主なる神様の声、あなたのすぐそばで語りかけておられる御声なんです！ その御声に従って、神様に心の目を向けましょう！ ヤコブの夢の中で天と地をつなぐはしごがありましたね。それは、やがて天から降って来てくださるイエス様をあらかじめ表していたのです。イエス様は、十字架で命を投げ出して、私たちの罪を負ってくださいました。私たちが天の御国に登って行ける「はしご」になってくださったのです。しかも、そのはしごは自分の力で必ず上に上らなければならぬものではありません。イエスさまと一緒にいてすくと引き上げてくださるのですよ！ 絶対に一人ぼっちにかなりません。

まとめ

いつも一緒にいてくださる神様に目を向けて生きるなら、何も怖いものではありません。悲しみは癒され、罪は赦され、心は愛で満たされます。どうか忘れないうでください、神様は目に見えなくても、この耳で御声が聞こえなくても、いつもいっしょだということ！

♪神さまといっしょいっしょ♪(イン73)

聖書 創世記50・15～21 テーマ すべてを良きに変える神

序論

(高橋頼男)

ヨセフの物語は創世記37～50章に記されています。彼の生涯は波乱万丈、逆転劇の連続ではらはらさせられます。それは様々な試練を通して生きて働かれる神による麗しい摂理の物語であり、ヨセフを通して神の救いの計画が成就していくという、救済史の偉大なドラマです。

カナン地方に激しい飢饉ききんが起こり、ヤコブは穀物の買い付けのために息子たちにエジプトに行くよう言いつけました。エジプトには、かつて兄弟たちが憎んで奴隷として売り渡した弟ヨセフが、20年を超える年月を経て、今や宰相となってエジプト全国を支配していました。

一、ヨセフと兄弟たちの再会(15～21)

ヨセフは、カナンからやってきておそるおそるエジプトの宰相(ヨセフ)の前にひれ伏し食料を求める十人のイスラエル人を見た時、それが自分たちの兄であることがわかりました。一方兄たちは、今をときめくエジプトの宰相が弟ヨセフであるうとは夢にも思いません。ヨセ

フはある考えをもって、わざと横柄な荒々しい態度で兄たちをあしらいました。しかし、長い年月を経て兄たちの顔を見、懐かしい故郷の言語を耳にして心が動かされます。二度目に彼らがエジプトを訪れた折、そこに弟ベニヤミンを認めると、なつかしさに心がせまり、これ以上こらえられなくなって急いで部屋に逃れ、声を上げて泣きました。そしてついにヨセフは、兄弟たちに自分の正体をうちあけるのです。同時に彼は、二十数年前に自分が兄弟たちの憎しみによって、エジプトに売られたことの背景に、主の深いご計画があったのだと悟りました。

ヨセフは、同席していたエジプト人たちをみな退席させ、兄弟たちだけになったとき、声を上げて泣きながら、ヘブル語で「わたしはあなたがたの弟ヨセフです。お父さんはお元気ですか」と語りかけました(45・2～)。

驚いたのは兄たちです。返事をすることもできず、呆然ぼくぜんと立ちつくしました。同時に非常な恐れを感じました。あんなにひどい目に合わせた弟ヨセフが、本当にこのエジプトの大臣ならば、自分たちはどんなにひどい仕返しを受けるかわからないと思ったのです。しかし、半信半疑の兄弟たちに近づいたヨセフは言いました。「わ

たしはヨセフです。あなたがたがエジプトに売った者です。しかしわたしをここに売ったのを嘆くことも、悔やむこともありません。神は命を救うために、あなたがたよりさきにわたしをつかわされたのです。…それゆえわたしをここにつかわしたのはあなた方ではなく、神です」。

二、ヨセフの信仰(19～20)

長い間、異教の地に生活し、しかも世の権力者になっていたヨセフ、生活様式も全くエジプト化し、エジプトの服装、言語、名も「ザフナテ・パネア」(41・45)と呼ばれるようになっていましたが、やはりヤコブの子でしな。アブラハム以来の信仰の血と祝福の流れは彼の内になお生きていたのです。外面的にはどんなに異教化していても、彼は神の民イスラエルの心をしっかりと内に秘めていました。世俗の中に身を置きつつ、「主がヨセフと共におられた」(39・2、21、23)との恵みによって、生き生きと神への信頼に生きてきた人の姿を見ます。そして、これは彼と共にいてくださった神の恵みです。

ヨセフは、エジプトの総理大臣としてではなく、ヤコブの子の一人として、アブラハム、イサク、ヤコブの神を信じ告白する者として、そして、共にいてくださる神

の恵みをあらゆる困難な中で経験したひとりの証人として立っているのです。

三、摂理信仰に生きる幸い(22～26)

ヨセフの身内のものが来たというので、パロをはじめエジプトの人々は大歓迎しました。そしてついに老いた父ヤコブも、エジプトが備えた車に迎えられて、エジプトへと移住することになったのです(45・21～46・7)。ヨセフはヤコブの死を看取り、また自らも満ち足りた死を迎えます。このようないきさつの中に、偉大な神の計り知れない救いのご計画が着々とおし進められているとは、誰が想像することができたでしょうか。悲しみも苦しみも、誤解も恐れも、困窮も不安も、「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さる」(ローマ8・28)とは、なんとという素晴らしい神の恵みでしょう。どんな時、どのような展開の中にも、主が共におられ、力強いご支配の中にすべてをみ心のまま、万事を益となるよう導いて下さいます。

結論

わたしたちは、この神を信じて生きるのです。

研究資料

(小平徳行)

この箇所はヨセフ物語の最後の場面の一つである。特に20節は、この物語の全体の鍵となる言葉である。また、ヨセフ物語を学ぶ上で、主がヨセフと共におられたことと、ヨセフがキリストのひな型であることも覚えておきたい。

テキスト

15 父ヤコブの死によって兄たちは、ヨセフと自分たちとを結び付けていたものがなくなつたと感じ、彼らはヨセフの報復を恐れた。ことによると あくまで可能性として。すべての悪に、仕返しする。ここでは強調するために「報復する」(Ⓔ)シユープ)という語を2度続けており、「十分に、確かに、仕返しする」という意味が込められている。「すべての悪に」とあわせて、兄たちは、ヨセフの報復が徹底したものになるのではないかと恐れている。兄たちは、すでに自分たちの罪を悔いており、ヨセフも悟られないようにそれを聞き分けていたが(42・21〜23)、直接ヨセフに対して、悔い改めを言葉に表していなかったために、ヨセフに赦ゆるされたという確信を持ってな

かつたのであろう。

16〜17 兄たちはヨセフのあわれみを得るためにあらゆる努力をした。彼らはことづけして 兄たちは用心深く、直接会う前に人を介して伝言した。あなたの父は死ぬ前に命じて言われました 父が死ぬ前の非常に厳粛な時の命令であることを強調している。これは兄たちの作り事であるという見方もある。なぜならこのような指示をしたことは明記されていないし、かつて兄たちがヨセフにどんな事をしたのかをヤコブは知らなかつた可能性があるからである。しかし、ヤコブはヨセフを信用していたにせよ、不安を示す兄弟たちのために、この発言をした可能性は十分ある。あなたの兄弟たちはあなたに悪をおこなつたが、どうかそのとがと罪をゆるしてやっってください 旧約聖書では悪い行いに関して4つの主要な用語が使われているが、そのうちの3つがここに使われている。「悪」(Ⓔ)ラー、「とが」(Ⓔ)ペシヤ、「背く」という言葉に由来する。罪は神に背き、人に背くことによつてその正体を表す、「罪」(Ⓔ)ハッター、「的外れ」の意味で、目標を失い、道から外れることである)。このことから兄たちは自らの罪を包括的に様々な角度から捉

えて悔い改めていることが分かる。ちなみにもう一つは〔ハ〕アウオーンで、これは「ゆがんでいる」という言葉に由来し、心の思い、言葉、行動がゆがんでいることを意味する。これはユダの悔い改めの言葉（44・16）に使われている。ヨセフはこの言葉を聞いて泣いた。その心は必ずしも明らかではないが、父ヤコブの言葉を聞いたことや兄たちの心情をあわれに思ったことと、兄弟の結びつきを新たに感じたゆえの涙であると思われる。また、こうして人を介して伝えなければならぬほど、自分兄たちから恐れられていることに対してでもある。ヨセフがここまで示してきた善意が、兄たちへの赦しの心から来ていることを理解されていない悲しみも含まれている。

18 兄弟たちもきて、彼の前に伏して ヨセフのかつて見た夢（37章）が再び成就した（42・6、43・26、28）。

19 わたしが神に代わることができましようか ここでヨセフは神こそが真のさばき主であって、自分にはその権威はないことを告白している。

20 あなたがたはわたしに対して悪をたくらんだが、神はそれを良きに変らせて これらローマ8・28と共に撰

理信仰の典型的な言葉である。内容的には45・4〜8で兄弟たちに話したことと同じ。兄たちは、ヨセフの見た夢の実現を阻止しようとして、ヨセフを売り渡した（37・20）。しかし、神はヨセフといつも共におられて（39・2、3、21、23等）、それを良きに変わらせ、民の救いのために用いられたのである。そしてヨセフの見た夢を成就させた。人間の罪さえも、神はご自身の良い目的のために用い、すべてのことを最善に導かれたのである。まさに人間が自らの罪深い意志によって、キリストを十字架につけたが、これは神の永遠のご計画である救いの成就であったこと（使徒2・23）と同様である。この点でヨセフはキリストのひな型であった。この世の悪を超えて、神はすべてを支配され、ご自身のご計画を成し遂げられる。良き（ハ）トープ）「善」の意味。「あなたは善にして善を行われます」（詩篇119・68）などにも使われている。ローマ8・28の「益」も「善」の意味。神の摂理は、神の善なるご性質によるものであり、神のはかり知れない愛と知恵と力の結晶である。

参考図書 8月13日分と同じ。

聖書 創世記50・15～21

タイトル いつもベストだよ！ 神様のみわざ

暗唱聖句 神はそれを良きに変らせて、今日のように

に多くの民の命を救おうと計らわれまして。

創世記50・20

目標 すべてのことを益としてくださる神を信じて生きる。

導入

(和田 治)

みなさんには、ものすごく辛く悲しい思い出があるでしょうか。もし、そんな辛い出来事を、神様が導いてくださって、良いことに変えてくださったなら、どうでしょう？ 実は、「最悪〜！」ってことでも神様は最善に導かれるお方なんです。ヤコブの十一番目の息子のヨセフの人生を見れば、それがよくわかりますよ。

下がったり上がったりのヨセフの人生

ヨセフはお父さんのヤコブからとっても愛され、幸せに暮らしていました。でも、そんなヨセフをねたんだお兄さんたちが、憎しみにかられて、遠い国エジプトに売飛ばしてしまつたのです！ さらに、まじめに働いて

いたヨセフなのに、無実の罪で牢屋ろうやに入れられてしまいます。まさに「最悪〜！」ですよ。

ところが、その牢屋にいたことがきっかけで、ヨセフは、エジプトの王様パロの夢を解き明かすことになりました。「王様、やがて大飢饉だいきげんが来ます！」神様に示されたヨセフの言葉に、パロはびっくり！「神の霊を持つこのよいうな人がほかにいるだろうか！」と、ヨセフを、王様である自分の次に偉い全国をつかさとしたのです。

お兄さんたちとの再会

「エジプトに行つて食べるものを買つておいで。でないとみんな死んでしまう！」ヤコブに命じられて、ヨセフのお兄さんたちは、食べ物を買いにエジプトにやってきました。ヨセフの前にひれ伏す彼らを見て、ヨセフは「兄さんたちだ！」とすぐわかりました。もちろん彼らには、ヨセフだとは分かりません。エジプトに彼を売り飛ばしてから二十年以上経っていましたし、まさかエジプトのつかさがヨセフだなんて、夢にも思いませんから。幾度かのやりとりの後、ヨセフは弟のベニヤミンを奴隷としてエジプトに残し、兄たちは国に帰るようにと命じました。その時、お兄さんの一人ユダがこう言つたので

す。「この子を国の父のもとへと帰らせてやって下さい。この子が戻らなければ、年老いた父は悲しみのあまり死んでしまいます。私を代わりに奴隷にして下さい！」。

神さまの導きを信じるヨセフ

(あのととき、『ヨセフなんて売ってしまえ!』と言ったユダ兄さんが、お父さんを思って自分を犠牲にしようとしている…)。ヨセフの指示で、お兄さんたちを残して家来たちはみな、部屋から出されました。「うおおおっ…!」ヨセフは大声を上げて泣き出しました。「兄さん、私はヨセフです!」(ええっ…!?)驚きのあまり声も出ないお兄さんたちにヨセフは続いて、こう言いました。「私を売ったことで自分を責めないで下さい。何もかも、神様のお取りはからいだったのです。大飢饉の中でもみんなの命が救われるように神様が備えて下さったのですよ」。ヨセフはお兄さんたちを心から赦ゆるしていました。

良きに変わらせてくださる神様

その後、ヤコブも家族の皆もエジプトに越してきました。「お父さん!」「おお、ヨセフ! 死んだと思っていたお前にまた会えるなんて!」父ヤコブをヨセフは抱きしめ、いっぱい泣きました…。

やがて、年老いたヤコブは死にました。そこでお兄さんたちは心配になって来ました。「ヨセフは私たちを憎んで仕返しするかもしれない」。そこでヨセフに頼みました。「これはお父さんが死ぬ前になさった命令です。『ヨセフに言いなさい、兄たちを赦してやってください、と』。ですからどうか、私たちを赦してください」。ヨセフはそれを聞いて情けなくなつて泣きました。(そんな作り話までして。私が本当に赦していると信じる事ができないのだな)と。「恐れないでください。確かに兄さんたちは私に悪いことをたくらみました。でも、神はそれを良きに変わらせて、多くの民の命を救われたのです。一緒に神様に感謝しましょうよ!」ヨセフが言ったように、すべては神様のご計画だったのですね。ハレルヤ!

結び

ねっ! はっきり分つたのでしょうか? 神様は今も、同じように、どんなに『最悪!』と思うようなことであっても、良きに変えてくださるんです。神様がなさることはいつも『最善』^{ベスト}なんです! このお方を信じて生きる人生って、最高ですね! ますます神様を信頼しましょう。
♪神さまの声きこえるかい♪ (イン84)

聖書 マタイ9・1〜8 テーマ 罪の赦しの恵み

序論

(福井文彦)

この個所の出来事は、「中風の人のいやし」と呼ばれています。しかし、ここで真に問題にされていることは、イエスが単に病をいやすことができるだけでなく、罪を赦す権威を持つておられることです。並行記事のマルコ2・1〜12、ルカ5・17〜26をも合わせ見ながら進めていきます。

一、罪の赦しの宣言

イエスは、カペナウムのある家で教えておられました。そこには大勢の人々が集まり、家の入り口までいっぱいになっていました。そこへ一人の中風の者が、四人に運ばれてやって来ました。ところが、戸口までも大勢の人で、イエスに近づくことができなかつたのです。

そこで、家の外側から屋上に上がる階段をのぼり、屋根をはいで大きな穴をあけました。家の中にいた人々に天井から突然ばらばらと土が落ちてきました。すると、中風の者が床のまま吊り降り降ろされてきたのです。そこに

は、中風の者が横たわっていて、屋根からのぞいている人たちは哀願するようにイエスを見ました。

するとイエスは〈彼らの信仰を見て〉、いきなり〈子よ、しっかりといなさい。あなたの罪はゆるされたのだ〉と宣言されたのです。〈彼らの信仰〉とありますから、中風の者を運んで来た四人の人たちの信仰も含まれています。しかし、肝心なのは中風の者の信仰です。何よりも彼の信仰を見て、イエスは罪の赦しを宣言されたのです。

二、「冒瀆」という批判

ところがイエスが罪の赦しの宣言をされると律法学者たちは、心の中でこうつぶやきました。〈この人は神を汚している〉と。というのは、律法学者たちは罪を赦すことができるのは神だけであると考えていたからです。彼らはイエスが神であることを認めていませんでした。ですから、神以外の者が罪を赦すなどとは、とんでもない罪だと思つたのです。

当時のユダヤ社会では、病気はすべて罪の結果であると信じられていました。そこで病気にかかるのは、他の人よりも罪深いからだと考えていたのです。これは、全く聖書的ではなく(ヨハネ9・1〜3参照)、イエスは、

こうした因果応報的な考えを受け入れておられませんでしたが。

それにしても、どうしてイエスはここで罪の赦しを宣言したのでしょうか。他の病人たちにしたように、ただちに手を差し伸べて彼を立ち上がらせることをどうしてしないのだろうか、人々は思ったことでしょう。

しかし、この個所で最も大切なことは、罪こそが人類にとつての根本問題であり、その解決のためイエスが来られたということなのです。

三、どちらがたやすいか

そこでイエスは「あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか」と質問されました。私たち人間の間では、罪が本当に赦されたかどうか、その結果はだれにも見えません。すなわち確かめようがないので、口からの出まかせであっても言うことができます。しかし、中風のいやしは、起きて歩くことによってすぐにわかります。ですから、「起きよ」とは安易に命じることではできないのです。私たち人間にとつてはこちらのほうが難しいのです。

しかし実は、病気をいやすよりも罪を赦すことのほう

が、はるかに難しいのです。というのは、罪の赦しは、ただ神のみによって与えられることだからです。そして律法学者はそのことを知っていました。そこでイエスは彼らにとつて難しいと思われていた中風のいやしをなさつたのです。

そこでイエスは、「人の子は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言って、ただちに中風の者を立ち上がらせました。立ち上がった彼は、床を自らたたんで家に帰って行きました。律法学者は、イエスの罪を赦す権威に対して言い逆らうことができませんでした。この奇跡によって、イエスだけが罪を赦す権威を持つておられる唯一のお方であることが示されたのです。

結論

イエスだけが罪を赦す権威を持つておられます。そして中風の者だけでなく、だれもが罪の赦しを必要としています。イエスを信じ近づくと、中風の者のように罪が赦され、起き上がり、喜び勇んで歩む新しい人生が始まるのです。

研究資料

(中島啓一)

テキストト

ここでの中心主題は、罪のゆるしの權威についてである。病を癒いよすことができるイエスは、すべての病や苦難の根である罪を滅ぼし去ることがおできになる(病と罪の關係については後述を参照)。罪を滅ぼし、罪のゆるしを人に与えることこそがイエスの本来の使命であり、それは十字架上で達成されるものであった。十字架なくして罪のゆるしはなく、罪のゆるしなくして本来の癒しもない。イエスは罪をゆるす權威を持つ者として、神の国の到来を宣言し、本当の救いへと人を招かれたのである。

テキストト

2 人々が中風の者を床の上に寝かせたままでみもとに運んできた マルコヤルカでは、四人の者がこの病人を運んできたこと、そして群衆のためにイエスに近寄ることができなかつたので、屋根から床ごとつりおろしたことが記されているが(マルコ2章、ルカ5章)、マタイはそれらの記述を省いて、罪のゆるしに焦点を絞っている。彼らの信仰 イエスの癒しの力を信じて、なんとしても

みもとに行こうとした彼らの信仰。運んできた者たちだけでなく、病者本人も含まれるであろう。マタイは、詳細を省きつつも、マルコヤルカが記したその行動を念頭に置いていたと考えて良いだろう。子よ [ギ]テクノンに「わたしの」子よ」という親しみを込めた呼びかけで、そこにはイエスの愛とあわれみが込められている。あなた**の罪はゆるされたのだ** 当時のユダヤ社会では、病は罪の結果であるという考えが蔓延まんえんしていたが(ヨハネ9・2参照)、因果応報の考えは全く聖書的でない(もちろん品行や不摂生の結果として病気になるといった因果關係は当然あり得る)。義人が病で苦しむこともあるし、逆に悪人が健康で長生きすることもよくあることである。それでは病と罪は何の關係もないかと言うと、そうではない。むしろ、すべての病と苦難の起源は、死そのものと同様に、罪がこの世に入ったときにさかのぼると言える。その意味に限れば、すべての病や苦難は罪の結果なのである。この個所の中心点は、罪こそが人類にとつての最も根本的な問題だということ、そしてその解決のためにこそイエスは来られたのだと言うことである。イエスは、十字架と復活を通して、罪の一症状に過

ぎない病や苦難にだけではなく、その根本である罪そのものに対して決定的・致命的な一撃を加えたのである。

3 神を汚している 律法学者たちは罪をゆるすことができるのは神だけと考えていた。洗神罪せんじんざいは基本的には神の名の乱用に適用されたが、その延長として、神になりすます、あるいは神にしかできないことをすることも冒瀆ぼうどくと見なされた。彼らは、それまでの数々の出来事からイエスの神的權威に気付くべきであったが、形式主義に陥っていたゆえ、靈的な感性が鈍っていたのである。

4 なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか 神の名と主権を守ろうというのは建前であって、律法学者たちの動機は、ご自身に対して抱いているねたみなどの悪意であることをイエスは見抜いていた。

5 どちらがたやすいか 人間的な視点から見ると、結果が即座にあらわれ、効果がなければそれがすぐに露呈する病の癒しよりも、いかようにも言い逃れのできる罪のゆるしの宣言の方がたやすく思える。しかし本当の意味で難しいのは、言うまでもなく罪のゆるしである。

6～7 人の子は地上で罪をゆるす權威をもっていることが、あなたがたにわかるために 」（に）のみわざの

目的がはっきりと示される。人の子（ダニエル7・13（14参照））であるイエスが罪をゆるす權威を持つていることを人々に知らせることである。目に見えない罪のゆるしがそこでなされたことの証拠として、目に見える癒しのわざが行われたのである。**地上で** は「終末の到来に先がけて」の意。イエスによって神の国は既にもたらされ、信じる者はその前味を享受することができる。人の子として来られ、終末の祝福をこの世界にもたらしたイエスは、その使命のために、罪のゆるしの權威を持つておられるのである。その權威によってイエスは、**起きよ、床を取りあげて家に帰れ** と命じた。**すると彼は起きあがり、家に帰って行った** この反応は、イエスの命令に即座に、そして正確に応答するものであった。

8 恐れ 畏怖いふの念は神的な顕現に対してなされる反応（17・6、28・5）。**こんな大きな權威を人にお与えになった神をあがめた** 群衆は、イエスの神性を認めるには至らないが、彼に与えられた神的權威を認め、それを与えた神をあがめたのである。

参考図書 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (NCB), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書 マタイ9・1〜8

タイトル 罪の赦しの恵み

暗唱聖句 子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪は

ゆるされたのだ。 マタイ9・2

目標 あらゆる祝福に先だって、罪の赦しの恵

みを受け取る。

導入

(土屋開夫)

もうすぐ夏休みも終わりですが、熱中症やケガからは守られましたか？ もし病院に行かなければならないくらい大変な時、誰かが連れて行ってくれると助かりますね。

私が関西聖書神学校にいた時、お友達の一部が急にひどいギックリ腰になってしまいました。身動きも出来ない程でしたので、同級生みんなで彼を折りたたみのベッドに乗せ、そしてゆつくり車に乗せ、病院に運びました。その時、まるで今日の聖書のお話みたいだなあ、と思いました。今日のお話は、ある病気の人を周りの人たちがイエス様のところに連れて来たお話です。

主のもとに連れて行ってくれる仲間

この人は「中風」と言って、体が麻痺してしまう病気にかかっていたいました。人によって、言葉がしゃべれなくなったり、手や足が動かなくなったりします。この人も、寝たきりで動けない程に病気が重かったようです。

そんなある時、イエス様が町に来られました。イエス様にお会いできれば、きつと癒されるでしょう。でも、自分では会いに行くことが出来ません。けれども幸いなことに、彼にはイエス様の元に連れて行ってくれる家族や友達がいきました。あなたも誰かをイエス様のもとに、そして教会に連れて行ってあげて下さいね。

全てを見通すイエス様の目

さてイエス様は、イエス様のもとに癒しを求めてきた彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、しっかりとしなさい。あなたの罪は赦されたのだ」と言われました。

彼らが求めていたのは、この人の体が癒される事です。けれどもイエス様はスゴイですね！ イエス様が人をご覧になる時、その人の表面だけを見るのではなく、その人の心の中や、過去・現在・未来、全てをご覧になるの

です。レントゲン写真よりスゴイですね。

そして、その人が求めているそのものではなく、それ以上のもの、その人に本当に必要なものを与えようと思えるのです！ イエス様がこの人をご覧になった時、体の癒しも必要でしたが、それ以上に「罪の赦し」が必要でした。全ての人にとって一番必要なこと、それは罪が赦されて神の子どもとされる事です！

罪を赦すイエス様の権威

するとそれを聞いていた律法学者たちが心の中で言いました、「この人は神を汚している」と。イエス様のことを神の御子だと信じていなかったたので、「罪を赦すことが出来るのは神だけなのに」と心で文句を言ったのです。

その心の声が聞こえたイエス様はこう言われました「あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか」。皆さんはどう思いますか？ 中風という体の病気を治すことは、もしかしたらスーパードクター（名医）でも出来るかも知れません。でもどんなに医学が進歩しても、人の魂の「死の病」で

ある「罪」を取り除くことは、決して出来ません。それが出来るのは、本当の神様だけです。

イエス様は神の御子ですから、人の罪を赦す権威（力）があるのです。けれども、心の中の罪が赦された事は、目には見えません。そこでイエス様は「人の子（イエス様）は地上で罪をゆるす権威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言って、この人の体の病気である中風も癒されたのです。こうすればイエス様の神の御子としての権威（力）が誰にもよく分かります。

まとめ

体の病気も人を苦しめますが、最も人を苦しめ、永遠の死に至らせる恐ろしい病気は「罪」という魂の病気で。ただ一人、神の御子イエス様だけがこの罪を赦し、私たちを神の子どもにして下さる事が出来るのです！

あなたはもう罪を赦してもらいましたか？ あなたの家族や兄弟やお友達はどうでしょう？ 本当の超スーパードクターであるイエス様のもとに皆で行きましょう！

♪両手いっぱい愛々（新聖歌483、ホ146、イン41他）

聖書 マタイ14・13〜21 テーマ 祝福されるささげ物

序論

(高橋頼男)

「パンの奇跡」については四福音書がこぞって取り上げています。この奇跡は、イエスのお働きの生涯における頂点を示すものでした。パンの奇跡、すなわち五千人の給食物語は、すべての人に感動的で、だれにも無条件に喜びをもたらした出来事です。へみんなの者は食べて満腹した」とありますが、やはり食べて満ち足りることの経験は記憶の中にいつまでも残るものなのでしょう。

この奇跡の起りは、五千人を超える飢えた群衆を前にして、小さな取るに足らないもの、パン五つと魚二匹が主の前に持ってこられ、ささげられたことでした。

一、あなたがたの手で(16)

弟子たちは、これほど多くの飢えた人々の食事を準備することは、自分たちの手にはとても負えないと判断しました。そこで、群衆を解散させ、彼ら自身がそれぞれ食べ物を求めることを提案しました。この弟子たちの判断と提案は、この状況においてきわめて常識的なもので

した。いわゆる群衆の「自己責任」に委ねたのです。しかし、イエスのお考えは違っていました。イエスは「彼らが出かけて行くには及ばない。あなたがたの手で食物をやりなさい」と言われたのです。そこで、彼らがつ持っているものを探すと、パン5つと、干し魚が2匹ありました。しかも、これは少年がもっていたお弁当だといえます。彼らはこれらを数えて「それが何になりますか」(ヨハネ6・9)と言いました。ここにはパン5つと魚が2匹よりほかに、自分たちの持てる物は、全く無に等しいことを認めざるを得ません。疲れ、飢えた大群衆の前に、弟子たちは何と小さく無力であったことでしょう。

二、それを、ここに持ってきなさい。(18)

弟子たちが途方に暮れていると、主は「それをここに持ってきなさい」と言われました。自分たちの持っているものを、いきなり人に与えるのではなく、まず、それを主のもとに持って行くこと、主におささげすることを命じられました。主はその小さな貧しいものを受け取られ、御手に取って祝福されました。そして、主が祝福されたものを再び弟子たちの手に委ねられたのです。弟子たちはそれを群衆に配りました。そのとき、人々は食べ

て満腹し、満足し、残りのパンくずを集めると十二の杯に一杯になりました。

私たちのささげものがどのようにして主に用いられるのか、その過程を大切にしましょう。なぜなら、私たちの小ささ、無力さに、主の祝福とその全能が臨む時、私たちは主にあって大きな働きを担うことができるのです。

ひとりの少女が言いました。「小さなわたしだけでは、何も出来ません。しかし、わたしの手の中にある六ペンスと、そこに神の御手が加えられるなら、どんなことでも出来るのです！」

パウロも言います。「わたしを強くして下さいかたによつて、何事でもすることができ」(ピリピ4・13)。

三、祝福されるささげもの

小さなもの、とるに足らないものであつても、主にやささげするとき、主はそれを手に取つて、きよめ、祝福し、お働きのため、人々のために用いてください。しかし、この小さなささげもの、「五つのパンと二匹の魚」は、どんなに小さくあつても、少年の持っているすべてであり、弟子たちが集めた全部であつたのです。

主が、「だれよりも多くささげた」と言われた、やもめの手に握られたレプタ二つは、宮にささげることが許された最少額でした。しかし、やもめの2レプタは、彼女の生活費のすべてだったので(ルカ21・1〜4)。

主が祝福されるささげものは、適当なもの、余裕を残したものの、まして、余りものなどであるはずがありません。主が喜んで受け入れられるささげものは、小さくても、貧しくても、私の全てであり、私のベストであるはずです。わたしたちのささげもの、奉仕に対して、主は「それが、あなたのベストですか？」とやさしく問いかけられます。「あなたは…恥じることのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい」(IIテモテ2・15)。

結論

わたしたちは、自分が主の働き人としてまことに小さく、卑しく、弱いものであることを知らされます。しかし、そのようなものを喜んで受け取り、きよめ、祝福して、御手の中で豊かに用いて下さる主を信頼し、私のベストをおささげしていきましよう。

研究資料

(宮澤清志)

四つの福音書に共通して登場する奇跡は、受難と復活の記事を除いてはこのパンの奇跡だけである(並行記事は、マルコ6・30〜44、ルカ9・10〜17、ヨハネ6・1〜14)。言うまでもないことであるが、受難と復活の記事はイエスの出来事のクライマックスである。では、なぜこの記事がすべての福音書に描かれているのだろうか。それはまず、この奇跡が弟子たちにとって非常に大きな出来事であったということである。それまでは個人的な癒しの奇跡であったものが、このような大群衆を前にしての、しかも大群衆のための奇跡へと発展してきたのである。そして次には、この奇跡の持つ霊的な意味の重要性の故である。ヨハネによる福音書では、この奇跡の後に「わたしが命のパンである」(ヨハネ6・35)と語られた。このパンの奇跡は、古来より様々な解釈がなされている(詳細は省略)が、「いのちのパン」であるイエスによって文字通りに行われたものである。

テキスト

このテキストは、大別すると二つに分けられる。13

14節の「イエスのあわれみといやしの記事」と、15節以降の「パンの供給」の記事である。

13 このこと この個所の直前に描かれているバプテスマのヨハネの殺害に関する記事のこと。バプテスマのヨハネの死は、イエスにとっては衝撃的な出来事であったであろう。注解者の中には、このヨハネの死をイエスの死の伏線ととらえる者もいる。舟に乗って イエスが向かった先は、ガリラヤ湖の向こう岸(ヨハネ6・1)であり、その目的は寂しい所へ行かれるためであった。

14 あわれんで マルコの並行記事では、この言葉の前に「飼う者のない羊のようなその有様を」(マルコ6・34)とあり、イエスがこの群衆をどのようにご覧になっているかをよく示す言葉として注目される(マタイ9・36)。

15 夕方になった 夕食どきになってしまった、という意味が込められている。群衆を解散させ、村々へ行かせてください この言葉は、弟子たちの現状認識としては極めて常識的な判断だったであろう。しかし、ある注解者は、弟子たちがカナの婚礼の奇跡(ヨハネ2・1〜11)の出来事を心にとめていたならば、このような言葉を出

すことはなく、イエスに期待したのであるかと述べている。そうだけでなく、弟子たちがこの直前にイエスの手を通してなされたいやしのわざを覚えていたなら、やはりこのような言葉は出なかったであろうと考えられる。いずれにしても、常識にとらわれていた弟子たちには、目の前の主のわざが見えなくなっていたのである。

16 あなたがたの手で 前節の弟子たちの言葉に対して、イエスには他の考えがあった。それは、弟子たちがこの群集を養うことであった。

17 わたしたちはここに、パン五つと魚二ひきしか持っています この弟子たちの言葉は、やはり前節のように現実しか見えない弟子たちの言葉である。「しか」という言葉にそれがよく表れている。わたしたちは持っているないのである。しかしこの言葉は同時に、次節の弟子たちの行為によってイエスの御業を引き出すという意味で、なくてはならないものだったともいえる。**パン五つと魚二ひき** ヨハネの並行記事を見ると、おそらくこれは少年のお弁当だったのではないかと推測できる(ヨハネ6・9)。このパンと魚は、当時の人々のごく普通の食物といわれており、特にパン(ヨハネ6・9では「大麦

のパン」は当時の貧しい人々の食物であった。

18 それをここに持ってきなさい たとえ「五つのパンと二ひきの魚でしかない」と思っただとしても、主はそれを用いて御業をなされる。主は、いかなる献げさげものであったとしても、神の国の御業のためには弟子たちが持ってきたものを喜んでお用いになるのである。

19 マルコの並行記事にみられる詳細(マルコ6・37(38))はここでは省略され、かわって弟子たちが直接手渡した姿が強調されている。弟子たちにとっては、イエスの素晴らしい御業に直接関与できる、これ以上ない素晴らしい機会であったであろう。

20 十二のかがこ 十二弟子を指す数字であるとも、イスラエルの十二部族を指す数字であるとも考えられている。

21 女と子供とを除いて 当時のユダヤ社会では、納税と徴兵の義務を負っていた成人男性のみを人数として数えていた。マタイはそのような会衆に対して福音書を書いたので、このような表現となっている。女性と子どもを加えた実際の人数は、一万人とも二万人とも言われる。

参考図書 9月10日分と同じ。

聖書

マタイ14・13、21

タイトル

5つのパンと2匹の魚

暗唱聖句

パンくずの残りを集めると、十二のかご

目 標

にいっぱいになった。マタイ14・20

所有する物、また自分自身を、神に献げる。

導入

(土屋開夫)

9月になりましたね。夏は教会を休む事が多かった人も、また気持ちを新しくして一緒にイエス様を礼拝していきますよね！

ところで学校も二学期が始まるけど、学校って色々な係りがあるよね。キミは何係り？ 飼育係り？ 保健係り？ 先生のお手伝いって大変だけど、楽しい面もあるよね。「こどものボクでも役に立つんだ！」って思うと嬉しくなってきましたか？ そう、キミは役に立つんです！

今日は、お弟子さんたちがイエス様のお手伝いをした話です。それは学校で言うなら、給食係りです！

小さなもの、少しのものでも

ある時、たっくさんの人々がイエス様の後についてきました。男性だけでも5千人、女性と子どもも含めると1万人以上いたかも知れません。もう夕方になったので弟子たちが「みんなを解散させて、それぞれで食べ物を買いに行かせましょう」と言うと、イエス様は「あなたがたの手で食物をやりなさい」と言われました。でも、弟子たちが持っていた食べ物は五個のパンと二匹の魚だけでした。ヨハネ6章を見ると、それを献たまげげたのは子どもでした。でもそれっぽっちでは、たくさんの人々にはとても足りませんね。

みんなもそんなふうを考えることはありませんか？ 「小さなボクには何もできないよ」とか、「世界中にはお腹を空かしている人がいっぱいいるけど、ワタシの少しのお小遣いじゃ何の役にも立たないわ」とか。

弟子たちもそう思ったでしょう。でもイエス様は言われました、「それをここに持つてきなさい」。どんな物もどんな人も、そこにあるだけ、そこにいるだけだったら役に立ちません。でも、何でも出来る素晴らしい神の御子イエス様に真心こめて献げる時、どんな物も、どんな

人も、素晴らしい役に立つようにイエス様が用いてくださるのです！

五つのパンと二匹の魚は、イエス様の祝福によって何千倍にも増やされ、弟子たちはそれを受け取って人々に配りました。増えただけでなく、きつとスゴクおいしかったに違いありません。イエス様の祝福で味付けされているんですから！そして、みんなお腹いっぱいになりました。

子どもの証しも用いられる

教会では「教会新聞」のようなものを作る事もよくあります。私も作っていました。そこには教会の皆さんのお証しを載せたりします。子どもが洗礼を受けた時などはその子どもらしい証しの作文をそのまま載せる事もよくありました。そのような教会新聞は、印刷するとあつと言う間に何千枚にもなつて、教会の皆で近所に配りました。それを見て教会に来て、イエス様を信じた人もいます。

なぜ十二のかご？

ところで、残ったパンを集めると「十二のかごにいっぱいになった」とあります。なぜ十二かご分、残ったと思いませんか？それは、イエス様の十二弟子たちへの愛と優しさだと思えます。弟子たちは給食係りを一生懸命にしたので、自分たちは食べる暇が無かったと思えます。そんな弟子たちのため残して下さった十二かごのパン。そこには「ご苦労様。よくわたしと一緒に働いてくれたね。ありがとう！」というイエス様の気持ちが込められているのではないのでしょうか。

まとめ

私たちには五本の指と二本の腕（二本の足も）が与えられています。この手で色々な事をイエス様に献げる事ができます。イエス様に用いてもらえるなんて、イエス様のお役に立てるなんて最高です！私たちの心と体をイエス様に献げましょう！イエス様はとっても喜んでくださいますよ！

♪主は僕らを用いてくださる♪（PW59）

聖書 マタイ14・22～33 テーマ 嵐を静めたイエス

序論

(高橋頼男)

パンの奇跡に喜び興奮した群衆がご自分を王にしようとする熱狂しているのを知られたとき、主イエスは、群衆と弟子たちを分け、弟子たちを強いて船に乗せて向こう岸へと出発させ、また、群衆を解散させられました。そして、ご自分分は、一人で祈るために山に登られたのです。

一、逆風に漕ぎ悩み、恐れる弟子たち (24～27)

主イエスに強いられて船に乗り込み、向こう岸を目指して出発した弟子たちでしたが、沖で向かい風に悩まされ、思うように進むことができません。夜通し漕ぎ、疲れて、夜中の三時頃になって暗闇が最も増すとき、イエスが水の上を歩いて来られるのを見ました。弟子たちは「幽霊だ!」と言って、叫び声を上げました。

ここには、逆風を恐れ、暗闇を恐れ、さらに、湖を歩いて近づかれる主イエスを幽霊と見間違えて恐れる弟子たちの姿があります。彼らは信仰ではなく、恐れに満ちています。私たちの信仰生活の中でも、厳しい現状に捨て置かれたよ

うな思いになって不安と恐れに捕えられ、不信仰に支配されてしまうことがあります。主イエスに従って船に乗り込み、漕ぎ出したはずなのですが、暗闇の中で漕ぎ悩んでしまいます。しかも、船の中に主はおられず、逆風がよいよ吹き荒れ前進できません。逆風とは真正面から吹いてくる風です。これからどうなっていくのか全くわからない不安と焦り、恐れに捕らわれてしまうのです。しかし、私たちが主イエスとそのみ言葉に従っているのなら、暗闇も逆風も決して恐れることにはないのです。なぜなら、主イエスはどんな状況の時にも私たちのことを見ておられ、執り成していただくからです。そして、闇が最も濃くなる時、私たちの思いもよらない方法で、私たちを助けるために近づいてくださり、船に乗り込んできて、すべてを支配し静めてくださるのです。主は弟子たちを強いて船に乗り込ませられ、湖の中で試みに会わせられました。これは主の訓練であったと思われまます。同様に、主はわたしたちをも、沖に漕ぎ出させ、暗闇と向かい風のただ中で、主に信頼することを教えられるのです。

二、おぼれたペテロ (28～30)

湖の上を歩いて近づいてこられるのがイエスであること

を認めたペテロは、おそばに行きたいと大胆な願いを口走りました。(主よ、あなたでしか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください)。すると、主はペテロの求めに対して(おいでなさい)と言われました。ペテロが船から一步、水の上に踏み出したとき、なんとペテロは水の上を歩いていたので。主のお言葉を聞き、お言葉に信頼して一步を踏み出すとき、まさしく信仰による世界が開かれるのです。ところが、ペテロが風の音を聞いてふと波を垣間見た瞬間、たちまち恐れが彼の心に入りました。そして、その恐れはたちまち彼の心と意思を支配したので。その結果、ペテロは信仰を失って、ぶくぶくと沈んでしまったのです。彼は大声で(主よ、お助けください)と叫びました。そんなペテロに主はすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて(信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか)と言われました。

私たちも、主ご自身から目を離して波風の音に反応して現実を見るなら、たちどころに主のおことばへの信頼を損ない、信仰の世界から離れ、自分をとりまく現実のみが大きくなってしまいます。

三、逆風の中で主イエスを見る(ヘブル12・2)

ペテロはなぜ沈んでしまったのでしょうか。彼は主イエスのみ顔を見、(おいでなさい)と言われたお言葉を聞いて一步踏み出した時、湖の上を歩きました。しかし、風の音を聞き主イエスから目を離して、他のものに目を向けた瞬間、恐れが彼の心と意思を支配して主に対する信頼を失わせてしまったのです。それは、彼が「水を踏む信仰とその歩み」を失った瞬間でした。

思いがけない困難が襲ったとき、苦しみや悲しみが押し寄せるときにこそ、イエスを仰ぎましょう。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」(ヘブル12・2、新改訳)。私たちがいつも心がけるべきことは、イエスから目を離さないこと、どんな場合、どんな状況からでも真っ直ぐにイエスを仰ぎ見ることです。「わたしは絶えず主に相対しています」(詩篇16・8、新共同訳)。

結論

主イエスから目を離さないでいきましょう。いつでもどこからでも、何度でも、主イエスを仰ぎましょう。そして、生きた信仰の歩みを導いていただきますように。

研究資料

(宮澤清志)

この物語の主題は、イエスがどのようなお方であることを示すためにある。暗唱聖句は27節におかれているが、33節の弟子たちの信仰告白もしっかりと取り上げたい。

テキスト

22 **それからすぐ** 前節までのいわゆる「五千人の給食」の奇跡の後。並行記事のマルコもヨハネも、この二つの記事はセットで登場しており、この二つの物語を相補的に理解しなければならぬことになる。しいてイエスの強い意志が表された非常に強い言葉である。弟子たちには、自らの行動を選択する決定権はない。

23 **祈るためにひそかに山へ登られた** 福音書においては、イエスの宣教活動における重要な出来事の前や後には、(山に登って)祈るということがしばしば言及される。

24 **数丁** 直訳は「多くのスタディオン」(1スタディオンは約200m)。マルコによれば、この時舟は「海のまん中」(マルコ6・47)にあった。**逆風** ガリラヤ湖特有の突風。

25 **夜明けの四時ごろ** 新改訳では「夜中の三時ごろ」

となっている。直訳では「第四の夜回り」となる。当時のローマ人は、午後6時から午前6時までの間を四等分して時間帯として用いていた。つまり第4の区分である午前3時から6時までの間を指す。**彼らの方へ行かれた** イエスは弟子たちを見捨てられることは決してない。山の祈りを終えられると、イエスは弟子たちの方へと歩みを進められるのである。あるいはイエスは困難に直面した弟子たちを助けるのに最も良い時を知っておられたのであろう。

26 **幽霊** この言葉は当時のユダヤ人たちには至極一般的なものであった。この言葉はいかなる幻影にも用いられていた。**おじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた** 「おじ惑い」「恐怖」「叫び声」といった同種の言葉が繰り返されており、弟子たちの驚きがどれほど大きかったかをよく表している。なお、イエスの現れに対して弟子たちがイエスを見分けることができなかったのは、エマオでの顕現(ルカ24・13)、テベリヤ湖での顕現(ヨハネ21・4)においても見られる。

27 **わたしである** (ギ)エゴ・エイミ 直訳は「わたしこそ」。神の自己啓示の言葉であって、ご自身を旧約

聖書のヤールウェと同一視された言葉である（出エジプト 3・14、イザヤ43・10）。このイエスこそ生ける神であって、風と波との支配者であるとの宣言の言葉である。恐れることはない。直訳は「恐れることをやめなさい」となる。

28 この個所から後の言葉は、並行記事であるマルコやヨハネにはない。マタイ独特の個所である。主よ、あなたでしたか 新改訳聖書では「主よ、もしあなたでしたら」と疑問形で訳している。しかし、この呼びかけは、前節の「わたしである」に対応しての「あなたなのですから」（直訳）という全能の神、自然の支配者への呼びかけの意図が込められていると考えられる。

29 おいでなさい イエスの答えはこの一言のみである。しかし、主の弟子にとつてはこの一言だけで充分であった。

30 風を見て それまでのペテロは、ただイエスのみを見ていたということの裏返しとしての言葉。主よ、お助けください 天の御国の民にとつては最も大切な言葉である。

31 信仰の薄い者 イエスはここで「信仰がない」とは

おっしゃらなかつた。「信仰が薄い」のであって、「信仰が少ない」「信仰が足りない」という意味である。信仰とは、主と主の言葉に信頼することであり、ここではイエスの「おいでなさい」という言葉のみを頼りにして、主から目をそらさずに歩むことであつた。信じつつも信じられない弱い弟子の姿がここに表れている。疑つたギリシャ語の原意は「二つに分かれる」である。一方では信じつつも、他方では嵐に気をとられて心が二つに分かれてしまうことである。

33 マルコにはこの弟子たちの告白は省略されている。弟子たちは同様の経験をすでに8・23〜27においてしていた。しかし、五千人の給食の奇跡とこの出来事によって、彼らの告白はイエスを「神の子」として礼拝するまでに至つた。まさにこの個所の中心は、イエスが誰であるかということを示しているのである。

参考図書 D・R・A・ヘア『マタイによる福音書（現代聖書注解）』、デイヴィッド・ヒル『マタイによる福音書（ニューセンチュリー聖書注解）』（いずれも日本基督教団出版局）他

聖書

マタイ14・22〜33

タイトル

嵐を静めたイエス様

しっかりとするのだ、わたしである。恐れ

ることはない。マタイ14・27

目標

人生の逆風の中でもキリストを見上げ、
信仰を持つて前進する。

導入

(松浦みち子)

皆さん、人の一生には、三つの坂があるとわかっていて、その一つはまさかの坂です。勉強やスポーツを一所懸命している時は登り坂、やる気がなくなったり、悩んだりする時は下り坂、思わぬ事故や怪我に出会う時はまさかの坂。このように、一生の間いろいろなことに出会いながらわたしたちの人生は過ぎていくのです。イエス様の弟子たちもそうでした。今日は弟子たちがまさかの出来事に悩まされるお話です。

あらしの湖

イエス様は5つのパンと2匹の魚で五千人以上の人々のお腹を満腹させました。弟子たちは自分たちがすばら

しいイエス様の弟子であることを誇らしく思い、喜びに満たされていました。ところが、そんな弟子たちをしいて舟に乗り込ませ、向こう岸に先に行くよう命じられました。そして、ご自分は大勢の人を解散させてから、ひとり祈るため山に登って行かれました。夕方になってもまだ山で祈っておられました。

弟子たちを乗せた舟はもうすでに岸から離れ、向こう岸に進もうとするのですが、逆風が吹いてきてこぎ悩んでいました。ペテロやヨハネなど元漁師もいましたが、どうすることもできません。一晩中、彼らは波に悩まされ木の葉のように揺れる舟にしがみつきながら「舟が沈んだらどうしよう」と震えていました。

弟子たちを励ますイエス様

明け方4時ごろ、まだ辺りは暗闇がおおっているころです。イエス様は風に悩まされこぎ悩んでいる弟子たちの様子をご覧になり、海の上を歩いて彼らの所に行かれました。弟子たちは、薄暗い湖の上を歩くイエス様の姿を見て、「何だ、あれは!」「幽霊だあ」と恐怖におそわれ叫び声をあげました。ガタガタ震える弟子たちにもむかって、「しっかりとするのだ、わたしである。恐れること

はない。」と声をかけられました。するとペテロが「イエス様、わたしに命じて水の上を渡ってお側に行かせてください。」と言うと「来なさい」と言われたのでペテロは舟から下り、水の上を歩いてイエスの所に行きました。しかし、一瞬間を見て、恐ろしくなり、溺れかけ「主よ、助けてください！」と叫びました。すぐに、イエス様は手を伸ばして彼を助け「信仰の薄い者よ、なぜ、疑ったのか。」と不信仰をたしなめられました。そして、ペテロとイエス様が舟に乗り込むと、たちまち風はやんでしまいました。

イエス様を仰ぎ見る

舟の中からこの様子を見ていた弟子たちは、イエス様を拝して「ほんとうに、あなたは神の子です」と信仰告白をしました。

イエス様は、これらの出来事を通して、弟子たちを訓練なさったのですね。パンの奇跡を見て、イエス様のなさったことを体験したにもかかわらず、イエス様が神であり、イエス様にとって不可能なことはひとつもないということを弟子たちは、まだ悟ることができませんでした。このような弟子たちを訓練するため、嵐の湖にあえ

て送り出し、ご自身はひとり山でとりなし祈っていてくださったのですね。何という深い愛のご配慮でしょう。弟子たちは、命の危険にさらされながら自分の無力さに気づき、イエス様を心から信じる者に変えられたのです。今、悩みの中にお友達がいますか？ あなたは何をしてもうまくいかないなあと行き詰まりを感じていますか？ でも、大丈夫です。「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない。」と一人ひとりにみ声をかけてくださるイエス様を信じ、仰ぎ見ましょう。

また、どんな事でも「主よ、助けてください。」と祈るとき、主は折にかなう助けを与えて下さるお方です。「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないうなかつたではない。罪は犯されなかつたが、すべてのことについて、わたしたちと同じように訓練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかつて時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」（ヘブル4・15〜16）。

♪ただひとり♪（ホ92）

聖書 出エジプト2・1～10 テーマ モーセの誕生

序論

(金井信生)

やがてイスラエルの民をエジプトから導き出す指導者として用いられるモーセですが、その誕生の時から人知を超えた神の救いの手が働いていました。また、危機の中で信仰を働かせた人たちがいました。

一、危機の中でただ主に委ねる

創世記の最後に、エジプトに移り住んだヤコブの子孫は大いに増えました。これを恐れた新しい王は、ヘブルびとを奴隷として苦しめました。それでもヘブルびとは増え、非常に強くなりました。そこで、王は生まれてくるヘブルびとの男の子はナイル川に投げ込むように命じました。その状況の中でモーセは生まれました。

両親は生まれた男の子を救う決心をし、「信仰によって」(ヘブル11・23)三カ月の間、隠していましたが、成長するにつれて隠しきれなくなりました。

男の子はパロの命令に従ってナイル川に連れてこられ

ました。ただ、両親は子どもを主の手に委ね、パピルスで編んだかごに入れて、葦の茂みに置きました。

〈かご〉と訳されている言葉は、ノアの洪水の「箱舟」と同じ言葉です。動力も舵もたず、ただ流れに任せるままの乗り物です。しかし、ノアもモーセの両親も信仰をもって、最善をなされる主の手にすべてを委ねました。またノアが鳩を放つて確かめたように、ここでは、モーセの姉がこの男の子がどうなるのかを見守っていました。

二、危機の中に備えられた救いの道

そこに王女(パロの娘)が身を洗うために、川に降りてきました。そしてかごと、その中の子どもを見つけました。顔つきで分かったのか、身を包んでいた布の柄やデザインで気づいたのか、王女はその男の子がヘブルびとの子であることに気づきました。

王女もパロの命令は知っており、〈かわいそうに〉思ったところに、モーセの姉が近寄って〈あなたのために、この子に乳を飲ませるうばを呼んでまいりましょうか〉と声をかけました。

まだ王女は、その子をどうするか決めていませんでしたが、もうすでにその赤ちゃんの責任を王女が持つていくのかのような声掛けに、王女は決心してその言葉に従いました。

王女が川に降りてきたタイミングと、そのあわれみ的心を主は備えておられました。また、見守っていた姉に、恐れないで王女に声をかけ最善の言葉を口にする知恵を与えられたのも主です。両親から始まって、危機の中でも危機を恐れず主を畏れる人が、祈り決心して行動する時、主はまことの神を知らない者をも思わぬ協力者として用い、救いの道を備えてくださいます。

三、危機を祝福に変えられる主

バロの命令は、エジプト中のすべての民に向けられていましたが、王女は従う必要がありませんでした。結果、男の子はモーセと名付けられて、宮中での教育と訓練を受けることができ、やがてイスラエルの民を率いるのに役立てることができました。

また、幼少時に母のもとで育てられたことにより、主を畏れる信仰の土台が据えられました。ナイル川に流さ

れて終わるはずだった赤ん坊の生涯は、主の不思議な手によって、信仰の基礎と最高の教育を与えられることになりました。

私たちも時に危機的な経験をすることがあります。しかし、イエス様を信じ救われたこと自体が、最大の危機から主の恵みによって救われた経験だったのです。スポーツなどで、「失うものは何もない」と挑戦していく言葉を聞きます。私たちも恵みによって救われ、生かされた者であることをおぼえて、危機の中で主に委ね、また知恵と勇気を与えられて、大胆に主の道に歩むことができるのです。

結論

モーセを水の中から引き出された主は、私たちも罪と滅びの中からすでに救い出してくださいました。なお危機を感じるがあっても、その中で神の守りと助けを経験する者となりましょう。

研究資料

(小平德行)

へブル人に生れた男の子をナイル川に投げ込めとのパロの布告は将来的にはイスラエルの全滅を意味する。これに抵抗する手段は人間的にはないように思われた。まさにイスラエルは危機を迎えたのであるが、その中で信仰によって歩んだ両親がいた。イスラエルの指導者モーセは、この信仰の中で生かされ、育てられたのである。

テキスト

1 レビの家のひとりの人 出エジプト6・20によれば、これはアムラムであり、**レビの娘** とはヨケベデである。

2 その麗しいのを見て ステバノはモーセについて「まれにみる美しい子であった」(使徒7・20)と表現している。ここは新共同訳では「神の目に適った美しい子」としており(新改訳も類似)、こちらの方がギリシャ語本文に即している。両親は信仰によって、この麗しさは神がこの男の子に特別のご計画を持っておられるしるしであると直感した。生きた信仰をもっている時、非常に小さな手がかりから神の顧みを感じ、勇気を得ることがで

きる。隠していた この行為は、単に親としての情からなされたものではなく、神は、この子を顧みてくださるという信仰、さらには、神はご自身の民を必ず守られるという約束に対する信仰による行為であった(へブル11・23)。彼らは「王の命令をも恐れなかった」(同)のである。たとえ危険が伴っても、信仰は行動という結果となって表われる。

3 もう隠しきれなくなったので 3ヶ月になった健康な赤ん坊の泣き声は大きいため、これ以上隠すことは不可能になった。ヨケベデは「ナイル川に投げこめ」というパロの命令の通りにしたが、できる限り生き延びることのできる手段を取った。パピルス 茎高約2メートルで葉は毛髪のように頂上に固まって生じる。この茎を編んで、防水のためにアスファルトを塗って舟を造った。かご(ヘテーパー) 創世記6〜9章の「箱舟」と同じ言葉。ナイル川の岸の葦の中においた おそらく浅瀬であり、かごが流されることがなく、また何もない岸辺よりはワニなどに襲われる危険が少ない場所であった。

4 その姉 ミリアム(民数記26・59)。事の成り行きを見守っていたのは母親でなく姉であった。この時母親

は、自分の子を完全に神にゆだねていたのであろう。

5 身を洗おうと 古代エジプトでは、神聖なナイル川で水浴びすることは、身を清めるだけでなく、寿命を長くすると信じられていた。

6 かわいいそうに思って パロの娘が王の命令にもかかわらず、へブル人の子にあわれみの情を抱いたのは女性特有のこまやかな愛情、本能的ともいえる母性愛のゆえであろう。しかし何より、神の御力が暴君の近くにいる人々の心に、善意と柔和な愛を置いたのである。古代エジプトの王女は非常に権勢があつて、王の命令にもかかわらず、へブル人の男子を王子のように養育することができたのである。彼女は無意識のうちに神の救いの御計画に参与することになった。

7〜9 モーセの姉は、パロの娘が赤子にあわれみの情を抱いたことを知ると、神からの知恵と勇氣を持つて、間髪を入れずに乳母を呼んでくることを申し出た。**わたしはその報酬をさしあげます** 母親は自分の子どもを十分な賃金をもらつて育てることになった。しかもエジプト王家の庇護のもとにあつて、迫害のさなかにも安全に育てることができるようになったのである。後年、モー

セはエジプト王家の一員としての扱いを受けながらも、へブル人としての民族感情に燃え、ついにエジプトを向こうに回して戦うようになった。それは、幼い頃へブル人である母親ヨケベデに育てられた事が、大きく影響していたと考えられる。この個所には「神」という言葉は出て来ないが、エジプトにおけるイスラエルを深く顧みられる神の御手が背後にあることを強く感じさせる。

10 モーセ (へ)モーシエ) ここではモーセの名の由来について、パロの娘が水の中から「引き出した」(へ)マシーヤ)という語呂合わせから説明されているが、そのモーセは自分の民をエジプトから「引き出した」者でもあつた。この名についてはエジプト語を考慮して、「生む」とか「子」を意味する「メス」に由来するという見方もある。

参考図書 西満「出エジプト記」『新聖書注解・旧約I』、安田吉三郎「出エジプト記」『実用聖書注解』(以上いのちのことば社)、レオ・G・コックス「出エジプト記」『ウェスレアン聖書注解・旧約篇I』(イムマヌエル綜合伝道団)他。

聖書 出エジプト2・1～10

タイトル 神様に信頼しよう！

暗唱聖句 信仰によって、モーセの生れたとき、両親は、三か月のあいだ彼を隠した。

親は、三か月のあいだ彼を隠した。

へブル11・23

目標 危機の中で、信仰によって神の助けを求めらる。

導入

(飯田勝彦)

私たちはよく「今週も信仰によって歩みましょう」と聞きますね。「信仰、信仰って言うけど、どういうこと？」と聞いたことありませんか。信仰とは神様を頼りにして生活して行くことです。神様を頼りにすることは、私たちの力となり支えになります。また、神様を信頼して歩む人に、神様は不思議なことをしてください。

パロのひどい命令

さて問題です。ピラミッドで有名な国はどこでしょうか？「そう、エジプトです！」。今から、約四千年も前にイスラエルの人々は、エジプトに住んでいました。彼らには、次々とたくさんの赤ちゃんが生まれ、イスラエ

ル人の数が増えていきました。すると、エジプト王パロは、イスラエルが国を奪うかもしれないと恐れたのです。

そこで、パロが考えたことはイスラエルの人々を苦しめることでした。彼らを奴隷にし、苦しい労働をさせました。でも、イスラエルの人々は減るどころか増え続けていきました。それを知ったパロは助産婦に「イスラエルの人々に男の赤ちゃんが生まれたら殺せ！」と命令を出します。でも、この助産婦たちは皆、神様を畏おそれていた。パロは次に「へブル人に男の子が生まれたら、みなナイル川に投げこめ」と命令しました。イスラエルの民は、パロのひどい命令によって、危険な中に追い込まれてしまいました。

神様への信仰

そんな中、レビ人の夫婦の間に可愛らしい男の赤ちゃんが生まれます。それがモーセです。この夫婦はパロの命令を知っていました。もし皆さんが、この両親だったらどうするでしょうか。命令に従わなければ子どもだけでなく、自分たちも殺されてしまいます。

モーセの両親は悩んだでしょう。でも、彼らはパロの命令に従わず、モーセを三ヶ月間も隠しました。それは、

非常に危険なことでしたが、これは両親の神様への信仰から来るものでした。両親は、神様が必ずモーセと、イスラエルの民族を守ってくださることを信じたのです。モーセの両親は、「今日もこの子を守ってください！」と必死に神様に祈ったに違いありません。

モーセは、両親の神様への信仰と愛によって、すくすくと育って行きました。泣き声も大きくなり、両親はもうこれ以上隠しきれず、モーセをかごに入れて川岸の葦の茂みに置いたのです。両親にとって子どもを手放すことは、辛いことだったに違いありません。でも、彼らはすべてを最善にしてくださいとさる神様の御手に我が子を委ねたのです。ここにも両親の神様への信仰がありました。

信仰とは、神様への信頼です。私たちも辛いことや困難なことがある中でも、愛である神様に心から信頼しましょう。

神様の助け

川に置かれたモーセの様子をそっと見ている人がいました。モーセのお姉さんです。姉が見ているとパロの娘が水浴びのために川に降りてきました。すると、娘はかごに入れられたモーセに気付きました。「モーセが殺さ

れる!」、モーセの姉の心が騒ぎます。しかし、パロの娘はモーセのことをかわいそうに思い、助けました。その時、モーセの姉がパロの娘に近寄り「モーセにお乳を与える女性を紹介しよう」と声をかけました。すると、パロの娘はすんなりとそれを受け入れました。そのことによってモーセは助けられただけではなく、実の母親からお乳を受けることができたのです。そして、大きくなるまで両親のもとでモーセは育てられました。

神様は、両親の神様に対する信頼を裏切ることとはされませんでした。やがてこのモーセがイスラエルの民を救うリーダーとなるのです。

まとめ

私たちの生活の中でも「これはどうしよう。困ったなあ」という事があります。その時にこそ、モーセの両親のように私たちを助け見守ってくださいとさる神様に信頼してください。神様は不思議なようにあなたを助けてくださいます。

♪生ける神♪(プレイズ&ワースhip 137)

聖書 ヨシユア6・1〜20 テーマ ヨシユアとエリコの町

序論

(高橋頼男)

ヨルダンを渡りカナンに進入したヨシユアとイスラエルの民の前に、エリコが立ち塞がっていました。カナンに侵入して約束の地を獲得していくためには、どうしてもまずエリコを攻略することが肝要でした。エリコは、古代からのオアシス都市であり、難攻不落の城壁を誇る町でした。出エジプト以来40年、荒野を彷徨^{さまよ}ってきた難民集団が、どうしてまともにエリコと戦い、攻略することができのでしょうか。改めてエリコを眼前に仰ぎ見たヨシユアは、どう戦ったらよいのか途方にくれました。しかし、この戦いは人間の戦いではなく、神が戦われる戦いです。したがって、人間の方法で勝利するのではなく、神の方法で勝利するのです。エリコは、神ご自身と神の方法による勝利によって初めて勝ち取られるのです。

一、主を軍勢の将として迎える(5・13〜15)

エリコ攻略のために思案していたヨシユアの前に、いきなり抜き身の剣をもった一人の人が立ちました。ヨ

シユアは思わず「あなたはわれわれを助けるのですか、それともわれわれの敵を助けるのですか」と問いかけました。その人は「いや、わたしは主の軍勢の将として今きいたのだ」と言いました。ヨシユアはそのお方の前で地にひれ伏して礼拝し、足のくつを脱ぎました。そのお方こそイスラエルの主であるお方でした。そこで主はヨシユアに驚くべきエリコの攻略方法をお示しになったのです。主を軍勢の将としてお迎えし、ひれ伏して礼拝すること、み前に足から靴を脱ぎ、戦いの主権をこのお方に完全に明け渡すことが神の方法による勝利の第一歩です。

二、主の言葉を信じる(6・1〜2)

主は、これから私はあなたに味方して、奇跡を起こし、強大な町とエリコの王と大勇士を打ち負かさう、そして、町をあなたと民に与えようと言われたのではありません。わたしは、すでに「あなたの手にわたしている」と、戦いが勝利をもって完了したかのごとく宣言されたのです。何のしるしも兆候もなく、説明もその過程も語られず、ただそれだけのことを言われたのです。ヨシユアは「アーメン」と信じて受け入れました。それが信仰です。信仰とは、告げられたみ言葉を信じることですが、し

かしその信仰はたしかに「望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認すること」(ヘブル11・1)です。神の信仰は私たちへの説得や納得ではありません。人間の合意や可能性でもありません。それは、ただ神の言葉を信じることです。しかし、そこに神の方法による勝利の第二步があります。

三、主の言葉に従う(6・3〜20)

さらに、神の言葉を信じるということはお言葉ですからお従いしますと、そのごとく信じ従っていくことです(ルカ5・5)。しかし、主のお言葉に従うことは、ほんとうに難しいことでした。

主のご命令は、六日間エリコの町を一日に一回、回らなければならぬ。七人の祭司がラッパを吹き鳴らし、主の箱をかく者はそのあとに従わねばならない。七日目には七回、回らねばならない。そして、民が大声で呼ばわるとき、エリコの町の石垣は崩れ落ちる。その時、民は町に乗り込み、その町を占領することができる…というものでした。果たして、ただこれだけのことでこの巨大なエリコの町が崩れるのだろうか。まことに信じがたいことです。何もせず、ただ町の周りを沈黙してひたす

ら歩くというのです。愚かで、たわごとのように思えてくる神の言葉です。沈黙の中にただひたすら歩きながら、「こんなことで大丈夫なのか、こんなことをしていいのだろうか」と、ヨシユアや民にふと疑念が湧いてきたかもしれません。しかし、とにもかくにも、ヨシユアと民は、この主の命令に従って、大真面目で主のお言葉を実行したのです。この戦いは「それは、戦闘態勢ではなく、宗教行事の行列だった。戦争自体が礼拝行為になっているのはエリコの戦い以外には見られない」(鍋谷堯爾)と指摘されるほどの異例の戦いでした。信じ従うということは、主のお言葉が分からなくても、まるで愚かのように思えても、ただ神のお言葉に信頼し、ひたすら聴き、そして従うことです。これこそ神の勝利の最終歩でした。その結果、ヨシユアと民は、驚くべき圧倒的な神の勝利を経験したのです。

結論

今日も、難しい問題や課題を抱えている私たちですが、主に明け渡し、み言葉にひたすら聴き、お言葉に徹底して従うことこそ、神の方法による勝利の道と心得ましよう。ここに人知を超えた神の力あるご支配があるのです。

研究資料

(宮澤清志)

テキストト

1 エリコ ヨルダン川西岸、死海の北約10キロメートルあまりの場所にあった町。オリエント世界最古の要塞都市の一つとされている。イスラエルの人々のゆえにエリコの住民は、イスラエル軍の侵攻の前に震えおのいていた(2・9、11、5・1等参照)。

2 5節まで、主がヨシユアに対して出されたエリコ陥落のための具体的な指示が語られる。本節はその指示の要約である。主 5・13〜15に登場する、主の軍勢の将と考えられる。見よ、わたしは：わたしは：わたしは エリコに対する勝利は神の賜物であり、この勝利が神の意志によつて既にすでに達成されたものであることをあらわしている。特に、わたしは という言葉は完了形であり、そのことを端的に物語っている。実際の占領は、神の側の既成の事実がこの地上において展開され、遂行されるにすぎないのである(天的既決定の地的追決定)。

4 七人 七日目 七度 「七」は、古代イスラエルでは聖なる数であり、また「完全数」であるとも言われて

いる。特に、宗教的祭儀には七という数字は重要である(レビ4・6、8・11、16・14等)。雄羊の角のラツパ通常、戦争(歴代下13・13以下)と礼拝式(民数記10・1〜10、詩篇47・5)において用いられた。

これまでの節からもわかることは、エリコの城壁の崩落の出来事は、イスラエルの民の軍事的行為ではなく、宗教的行為であるということである。同時にこの行進は、信仰者の信仰の歩みの行進であるとも見ることができさる。

8〜11 主の指示(2〜5)に従つて下されたヨシユアの命令(6〜7)は、その民によつて遂行された。この個所の詳細は、すでに前の個所によつて確認されている。ここで再びその詳細を記す。

まず、武装した者(4・13、6・7、9) が存在していたことから、これらの一連の行進は宗教的行為であると同時にやはり軍事的な行進という要素も加わっている。それは、主の軍勢の将(5・15)の存在からも明らかである。しかし、本日の聖書個所全体の文脈から見れば、やはり第一義的にはこれら一連の行動は宗教的行為である。なお、この武装した者(ハハルーツ)は、

戦闘の備えができている者、という意味を持ち、スポーツにおける前衛といった意味合いの言葉である。

次に、**雄羊の角のラツパ**(4、8、他)は、聖書では民に戦いに対する備えをするようにとの準備や、聖なる行進のために用いられている(民数記10・9他)。しかしここではこのような意味以外にも、主の臨在を示し、また主の解放を示す意味合いもあった。

そして、**町を巡(る)**(4、7、11、他)という言葉は詩篇48・12にも用いられており、シオン(エルサレム)を巡る巡礼者の巡礼の姿を示している。

しかし、この個所がその前後の個所と決定的に異なる点は、**あなたがたは呼ばわってはならない**というくだりである。イスラエルの民は、この戦いが主の戦いであることを徹底的に知る必要があった。主の戦いに人間のための声は不要である。

12〜14 基本的には前節までの一日目の行動と同じ。

15〜16 主がヨシユアに命じられた7日目の指令(4〜5)が実行される時が来た。

17〜19 **滅ぼ(す)**(聖絶する、滅ぼし尽くす) 旧約聖書、特に申命記とヨシユア記では重要な思想のひとつで

ある。イスラエルでは、戦争は宗教的行為である。それゆえ敵は〔**ハ**〕ヘーレム、主にささげられるべきものとして滅ぼし尽くさなければならぬものとされてきた。7章に登場するアカンは、この滅ぼし尽くすべきものを惜しんで横領し、一族もろとも滅ぼし尽くされた。戦争が聖なる戦争であるため、戦争に加わる者も聖なる者とされた。カナンの町々を攻略する者は、そこに住む人々を聖絶しなければならぬ(申命記20・16〜17)。なぜならば、彼らの偶像礼拝は不浄であり、それを除くことによつて、主の聖さは保たれるからである。この点がおろそかにされるとイスラエルの民は偶像礼拝に惑わされ、主の怒りを招くことになる。イスラエルが聖なる民であり続けるためには、異教の偶像礼拝から切り離されていなければならないのである。そうでなければ、アカンのように、自らが滅ぼされるべき者とされることになるのである(18)。ただし、金、銀、青銅、鉄およびそれらで造った器は、聖別されたものであつて、主の宮に携え入れなければならぬ(19)。

参考図書 リチャード・S・ヘス『ティンデル聖書注解ヨシユア記』(いのちのことば社) 他

聖書 ヨシユア6・1～20

タイトル 主の勝利

暗唱聖句 そうすれば、町の周囲の石がきは、くず

れ落ち、民はみなただちに進んで、攻め

上ることができ。 ヨシユア6・5

目標 人間的な方法でなく、神の方法によって

勝利を得る。

導入

(飯田勝彦)

先週は、イスラエルの民のリーダーになったモーセのことを学びました。今日は、ヨシユアです。ヨシユアはモーセの後、リーダーとなった人です。もし、皆さんがヨシユアだったらどんな気持ちでしょうか。「僕で大丈夫かなあ。みんなは僕の言うことを聞いてくれるかなあ」と心配になりませんか？ ヨシユアも同じ気持ちだったでしょう。でも彼はりっぱにリーダーとしての役目を果たすことができました。

困難という城壁

モーセの後を継いだヨシユアにとって最初の仕事は、ヨルダン川を越えてカナンの地に民を導き入れることで

す。不思議なようにヨルダン川がせき止められ、民は皆、ヨルダン川を渡ることができました。ヨシユアはホッとしたことでしょう。しかし、そこにはエリコの町がありました。エリコの町には大勇士(2)と記されるほどの、勇ましい者たちがいたのです。

エリコはイスラエルの民の力では勝ち目のない大きな相手でした。せっかく約束の地に入ったにも関わらず、エリコの城壁が困難という大きな壁となって立ちほだかったのです。

みんなも、「どうしよう。困ったなあ。大丈夫かなあ。」と困難な壁が目の前に立ちほだかるときがあるでしょう。それは決して特別なことではありません。イエス様は「この世ではなやみがある」(ヨハネ16・33)と仰われました。なやみや困難なときにどうするかが大切です。

勝利の約束

強いエリコを目の前にし立ち尽くしていたとき、主がヨシユアに現れて声をかけられました(5・15)。

主の言葉を確認しましょう。6・2を見てください。「主はヨシユアに言われた、『見よ、わたしはエリコと、その王および大勇士を、あなたの手にわたしている』」。

これを見て何か不思議に思うことがないですか？ ヨシユアはまだエリコと戦っていません。でも、主はすでにヨシユアがエリコに勝利することを約束しておられるのです。これはヨシユアが強いからではありません。このエリコの戦いは、主の戦いであり主が勝利して下さることを約束されているのです。

私たちが信頼する主は、いつも私たちより先に、恵みを備えていてくださるお方です。

主はただ勝利の約束をされただけではありません。エリコの町に対してどのように戦ったらよいのかを具体的に教えて下さいました。それは、ヨシユアと民で協力してエリコの城壁に上り、町に侵入しひたすら敵と戦え、というものではありませんでした。一日に一回契約の箱と共に角笛を吹きながらエリコの町を一周します。それを6日続けます。そして、7日目には町を7周して角笛を吹き鳴らし、同時に大声で叫びなさい。そうすると、城壁は崩れエリコの町に入っていき攻撃することができると、というものでした。

これが主の勝利のための作戦だったのです。

信頼して前進

主の勝利の約束は感謝ですが、その作戦を聞くと「本当に勝利できるのかなあ」と思いませんか？ リーダーであるヨシユアはどうしたでしょうか。彼は、主の命令に従って主の言われる通り祭司や民に伝えました。ヨシユアが主の命令を聞いたとしても、他の者たちも従わなければ意味がありません。この戦いは、みんなの協力が必要でした。幸いに祭司や民たちも主の命令に従って行動したのです。その結果、主の約束どおりイスラエルはエリコに勝利することができました。なぜ、彼らは従うことができたのでしょうか。それは、エジプトからここまで導いてくださった主に信頼していたからです。

まとめ

ヨシユアやイスラエルの民に勝利を与えられた主は、今、私たちが信じている同じ主です。主は、私たちのことをよく知っていて下さいます。そして、すでに勝利を与えてくださっています。主に信頼して歩みましょう。主は必ず困難を乗り越える力を与えて下さるのですから。

♪ 恐れなない♪ (プレイズ&ワーシップ146)

牧羊ひろば



川本教会 教会学校

●川本教会の現状

川本教会の教会学校は毎週日曜日の朝9時から45分間行います。30分間の礼拝の後、分級の時を持っています。現在のメンバーはクリスマスチャンホームの一家族、3人が出席しています。中学2年生、小学6年生、2年生です。そのお母さんも独身の時からCS教師をしておられ、毎週子どもたちと一緒に来られます。教師は牧師とお母さん教師二人です。テキストは牧羊者を用いています。礼拝メッセージは交代でしていますが、昨年からはCS教師だけでなく、かつてCS教師をしておられた教会役員の方(三人)にも重荷をかけたメッセージをしていただくようにしました。人が変わってお話をすると新鮮な気持ちで聞いてくれて、時には子どもたちから拍手がおこります。クリスマスチャンホームの子どもたちなので、生まれた

時から教会の子どもとして皆さんから愛されて成長してきている子どもたちです。お話をされる先生も聞く子どもたちも程よい緊張感とワクワク感があって子どもたちの反応はとてもいいです。時には子どもたちのおばあちゃんや教師を励まして下さいます。

毎月の終わりには「おたのしみ会」を行っています。「おたのしみ会」のお話は聖書の紙芝居をしたり、聖書物語の絵本を読み聞かせした後、ゲームをして楽しみます。子どもたちが描いた魚釣りゲームやペットボトルでボーリングゲームやかごを吊り下げて玉入れゲームなど、毎回子どもたちが楽しめるように工夫をしながら準備します。その日はお菓子(その中身は150円くらい)のプレゼントがあります。

毎週休まないで来る子どもたちの励みになればと企画したのは4回続けて出席すると「がんばり賞」がもらえることにしています。クリスマスチャンホームの子どもたちです。毎週教会に来ることは当たり前なのですが、学校の行事や部活動など、成長とともに子どもながらも闘いがあると思います。そんな中から励んできてくれ

るので、ささやかなプチプレゼント（百均で購入したもの）をします。子どもたちの成長に合わせて興味のあるものなど選んでいます。買う人によっても好みや傾向があるので、二人で交代をして買い物をしています。



イースターエッグ作り

●年間の行事として

最近ではイースター礼拝とクリスマス礼拝は大人と合同でしています。昨年のイースターエッグ作りは前日の土曜日に〈春のおたのしみ会〉としてたこ焼きパーティーをしました。婦人会の助けをかりて、子どもたちが礼拝



イースターエッグの完成

をしている間に準備をしてもらい、そのあとでわいわいみんなでたこ焼きを焼いて食べます。焼きながら待つ間、いろんな会話がはずみます。食べることは大好きで特にたこ焼きパーティーは盛り上がります。大人も子どもも楽しんでいきます。お腹も十分満たされたあとで、イースターエッグを作りました。たまごにかわいい星のシールやハートのシールを貼って、カラーセロハンに包んでモールで締めて出来上がりです。イースター礼拝の後、会堂のあちこちらに隠してエッグハンターをして楽しみます。

花の日には花かごや手作りカードとグッドニュースをもって、警察署や郵便局、川本駅（来年の3月にはJR三江線は廃止になります）、消防署、施設に入所しておられる姉妹を訪問します。夏にはオープンチャーチをします。7月の最後の日曜日に夕方から教会の庭でそうめん流しをします。子どもの大人もご近所の方々も来て下さいます。そうめん流しの桶は孟宗竹を切って作ります。この桶は私の親戚の協力により準備してもらいます。このときはその家族も参加してくれれます。メインはそうめんですがミニトマトやぶどう、きゅうり、ミニゼリー、

ソーセイジなどいろいろなものが流れてきて流す人も食べる人も楽しさ倍増です。



そうめん流し

秋には大人の礼拝において子ども祝福式をしています。お話は最初に子ども中心にお話をします。紙芝居をするときもあります。一年間、神様に守られたことを一

一人の成長をみんなで喜び感謝します。

クリスマスは大人と一緒に礼拝をささげ、祝会もしょに行きます。サンタの家族も登場します。昨年は大人と一緒に即興でしたが降誕劇をしました。覚えやすいように台詞を短くして、数回の練習でしたが楽しんでました。



サンタ

● 洗礼式

昨年のクリスマスの日、祝会も終わった後に、教会の近くの江の川（一級河川）で小学2年生の男の子が洗礼を受けました。クリスマスチャンホムの三人兄弟の末っ子で彼だけがまだ洗礼を受けていなかったのです。昨年の



降誕劇

夏の終わりから秋にかけて、彼の礼拝を聞く姿勢が変わってきました。信仰がまっすぐ入っていくようで、イエス様に対する信頼が強くなっていました。質問をするとイエス様に直結している答えをしてくれて、聞いている教師も驚きでこんな風に答えてくれるようになったんだと感じました。洗礼の事を教師であるお母さんに確認してもらおうと受けるのは当然のように返事が返ってきただようです。洗礼準備会を2回行いました。ある先輩に頂いた手作りのカードを用いたり、イエス様のことばかりやすく見えるキューブを用いて学びをしました。最後の学びの時に、「洗礼を受けたいですか」と確認すると、「受けたいです」と答えがかえってきました。小学2年生の男の子がイエス様を信じる決心してくれた喜びは今でも私の心に響いています。彼の信仰の表れとして、12月の寒い時ではありますが、「浸礼と滴礼とどちらがいいですか」と聞くと「川でザブーンがいい」と言ったので、江の川で行うことにしました。その当日は山陰にしてはとても穏やかな午後で、教会員の見守るなかで感動の洗礼式でした。クリスマスチャンホームの子どもたちの信仰表明は時を逃してはいけないと思います。まだ幼い

から先でと思っているうちに、サタンに信仰の芽をついばまれてしまいます。彼の生活は洗礼を受けてから、学校での様子が変わってきました。けんかをしそうな変わった時、ぐつとがまんのできる子どもに成長しました。これからも信仰の闘いは多くあるでしょう。見守りながらも成長していきたいと願います。

「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた。(ヨハネ21・15)

彼のお証をお載せします。

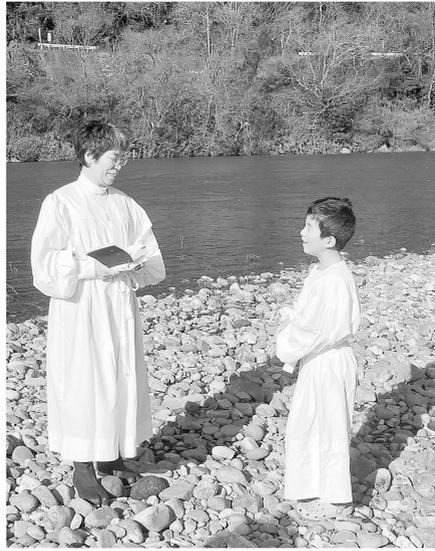
「あかし」

小学二年 川村真喜

ぼくは、12月25日、クリスマスに洗礼を受けました。

江の川でドボンと水に入って洗礼を受けました。イエス様をぼくは信じたからです。イエス様がいつもぼくを見守っているからうれいのです。

洗礼を受けてからけんかをしないようになりました。



洗礼式

イエス様が心の中でけんかをしたらダメと言って、それでぼくが自分からけんかをしたらダメと思います。それで友だちとなかよくしています。ぼくはずっとイエス様を信じて歩みたいです。

(大坪羊子)



● 神

日	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月2日		創造者なる神	イザヤ40・21〜26	同26節
9日		聖なる神	イザヤ6・1〜7	同3節
16日		愛なる神	1ヨハネ4・7〜11	同8節

● ノア・族長

日	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
7月23日		ノアの箱舟	創世記7・1〜24	同1節
30日		アブラハムの旅立ち	創世記12・1〜9	同1節
8月6日		イサクの井戸掘り	創世記26・12〜22	マタイ5・5節

● キリストのみわざ

13日	天からのほしご	創世記28・10〜22	同16節
20日	すべてを良きに変える神	創世記50・15〜21	同20節

8月27日

罪の赦しの恵み

同2節

9月3日 ラーデー

5つのパンと2匹の魚

同20節

10日

嵐を静めたイエス

同27節

● イスラエルの指導者

9月17日	モーセの誕生	出エジプト2・1〜10	ヘブル11・23節
24日	ヨシユアとエリコの町	ヨシユア6・1〜20	同5節

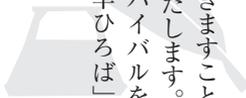
『牧羊者』のご購読・
ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、
B(主に小学生1~3年生向け)、
C(主に小学生4~6年生向け)
を用意しています。また、付録と
して「子ども聖書日課」、「フラッ
シュカード」、「み言葉カード」、「中
高科へのヒント」があります。い
ずれも、下記ホームページから無
料でダウンロードできます。送付
ご希望の方には、ワークは各600
円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト
教団(事務局)まで。申込み、部
数変更等のための用紙も、上記
ホームページからダウンロードで
きます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

お
わ
り
に

『牧羊者』二〇一七年度第Ⅱ巻をお届けできますことを
感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。
教師養成講座は金井望師に「教会学校のリバイバルを求
めて 三」を執筆していただきました。「牧羊ひろば」は
川本教会のCSを紹介していただきました。
今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。



聖書講解	石田高保師	小泉 創師	高橋頼男師
研究資料	金井信生師	福井文彦師	大頭眞一師
	宮澤清志師	小平徳行師	金井由嗣師
メッセージ例	辻林和己師	中島啓一師	飯田勝彦師
	松浦みち子師	和田 治師	
ワーク(A)	鎌野 幸師	後藤 真師	佐川直実師
(B)	山下大喜師	三輪直子師	野勢かほる師
(C)	竹崎光則師	田中裕明師	勝田幸恵師
中高科へのヒント	上森恭子師	三輪正見師	石田高保師
子ども聖書日課	後藤健一師	金田ゆり師	小野淳子師
フラッシュカード	丹羽 遥師	松浦あん師	佐藤由香師
み言葉カード	丹羽 遥師	後藤栄子師	
イラスト	丹羽 遥師		
ワープロ打ち込み	多田豊子師		
校正	長田栄一師	加藤 清師	山田和幸師
	中島啓一師		

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木
共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 **牧羊者**
二〇一七年度 Ⅱ巻

二〇一七年七月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室

神戸市兵庫区塚本通三二一九
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-1661
印刷所 菱三印刷株式会社
電話 (078) 576-1396

* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み